

**令和4年度大学教育再生戦略推進費  
「大学の世界展開力強化事業」計画調書  
～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～**

[基本情報]

(主な交流先:オーストラリア)

1. <b>大学名</b> <small>(○が代表申請大学)</small>	神戸大学		
2. <b>機関番号</b>	<small>代表申請大学</small>	14501	
3. <b>主たる交流先の相手国</b>	オーストラリア、米国、タイ		
4. <b>事業者</b> <small>(大学の設置者)</small>	ふりがな <b>(氏名)</b> 藤澤 正人	ふじさわ まさと	(所属・職名) 学長
5. <b>申請者</b> <small>(大学の学長)</small>	ふりがな <b>(氏名)</b> 藤澤 正人	ふじさわ まさと	
6. <b>事業責任者</b>	ふりがな <b>(氏名)</b> 大村 直人	おおむら なおと	(所属・職名) 理事・副学長
7. <b>事業名</b>	【和文】 世界的課題解決に向けた工学系グローバル人材育成のための国際共修/協働学修プログラム		
	【英文】 International Educational Program for Developing Global Human Resources in Engineering for Solving Global Issues		
8. <b>取組学部・研究科等名</b> <small>(必要に応じ[ ]書きで課程区分を記入。複数の部局で合わせて取組を形成する場合は、全ての部局名を記入。大学全体の場合は全学と記入の上[ ]書きで全ての部局名を記入。)</small>	<small>学問分野</small>	○ 人社系 ● 理工系 ○ 農学系 ○ 医歯薬系 ○ 看護・医療系 ○ 全学 ○ その他	
	<small>実施対象 (学部・大学院)</small>	● 学部 ○ 大学院 ○ 学部及び大学院	
工学部、グローバル教育センター、国際コミュニケーションセンター、キャリアセンター、バリュースクール			

9. 海外相手大学				
	国名	大学名(日本語)	大学名(英語)	部局名
1	オーストラリア	ロイヤルメルボルン工科大学	Royal Melbourne Institute of Technology	工学部
2	アメリカ	ジョージア工科大学	Georgia Institute of Technology	公共政策学
3	タイ王国	マヒドン大学	Mahidol University	工学部
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				

10. 連携して事業を行う機関(国内連携大学等)					
	大学等名	取組学部・研究科等名		大学等名	取組学部・研究科等名
1			4		
2			5		
3			6		

(大学名:神戸大学) (主な交流先:オーストラリア)

11. 「学校教育法施行規則」第172条の2第1項において「公表するものとする」とされた教育研究活動等の状況について、公表しているHPのURL

[https://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/education\\_info/index.html#4](https://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/education_info/index.html#4)

12. 本事業経費 (単位: 千円) ※千円未満は切り捨て

年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計	
事業規模 (総事業費)	19,980	19,880	19,980	19,880	19,880	99,600	
内訳	補助金申請額	19,980	17,880	16,180	14,380	12,980	81,400
	大学負担額		2,000	3,800	5,500	6,900	18,200

13. 本事業事務総括者部課の連絡先

部課名			所在地		
責任者	ふりがな (氏名)			(所属・職名)	
担当者	ふりがな (氏名)			(所属・職名)	
	電話番号			緊急連絡先	
	e-mail(主)			e-mail(副)	

(大学名: 神戸大学) (主な交流先: オーストラリア)

質の保証を伴った交流プログラムの目的と内容【1ページ以内】

① 交流プログラムの目的・概要等

【交流プログラムの目的及び概要等】

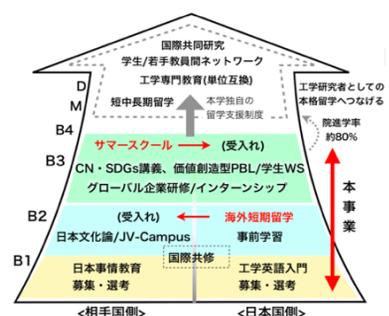
<目的>：本プログラムは、神戸大学（日本）とロイヤルメルボルン工科大学（RMIT;豪州）を中核とし、ジョージア工科大学（米国）、マヒドン大学（タイ）との連携により実施する。カーボンニュートラル(CN)やSDGsに伴うグリーン成長戦略において、日本が世界的なイニシアティブをとるには、先端的な科学技術の深化のみならず、経済・政策等の側面からも解決すべき課題を理解し、国際的に連携・協調して課題解決できる人材が必要とされる。すなわち複眼的な視点と分野横断的なコミュニケーション力、そしてグローバルな交渉力をもつリーダーの育成が緊要である。これら世界的課題には国境がなく国内だけでは解決できない。本プログラムでは、CNやSDGsなど世界的課題解決に資する「複眼的視点とリーダーシップをもつ次世代工学系グローバル人材」を養成することを目的とする。

学部1～3年生の複数年次に渡って国際共修場（グローバル企業研修、学生ワークショップ、CN/SDGs講義など）を継続的に提供することで、工学系学生のグローバル視点や異文化適応能力を定着化させ、単なる語学力向上だけでなく、工学分野における日本の国際的な立ち位置を理解し、主体的に考え・行動できる「工学系グローバルリーダー人材」の育成に取り組む。国内グローバル企業での国際共修プログラムやインターンシップ紹介等を通じて工学的視点から国際共修/協働学修体験を実施すると共に、外国人学生に向けた日本企業での就業形態や就職分野マッチングの機会を提供し、日本への留学/就職支援とする。本プログラムを通じて、両国における工学系学部学生の潜在的な留学障壁を低減させ、本格的な研究留学となる大学院での留学派遣/受入数や国際共同研究の増加につなげる。

<概要>：本プログラムは、本学工学部で実績あるグローバル・チャレンジ・プログラム(GCP)、国際サマースクールを基軸に、新たに全学教育センター群による支援体制を整備し、学内外に波及可能な国際共修型交流プログラムの構築を目指す。

具体的には、(1)学部1年次に英語外部試験・面接等を通じて選抜された学生を対象に、工学専門英語(テクニカルターム)や活用法を学ぶ「工学英語入門」やJV-Campus等を通じたCN/SDGs、日本文化関連講義などの留学事前学習を行う。(2)学部2年次には海外短期留学“派遣”を行い、相手国での工学系英語講義への参加、研究室施設見学、国際グループワーク、留学事後学修に取り組む。(3)学部3年次には相手国からの外国人学生を受け入れ、神戸地域のグローバル企業研修、CN/SDGsなど世界的課題解決をテーマとした新価値創造型PBL、学生主催ワークショップ、先端工学講義、工場/研究所見学会等を開催する。

留学派遣/受入バランスの取れた双方向交流を行い、大学各々での単位認定等の質の保証を伴ったプログラムを構築する。加えて、学内キャリアセンター支援により外国人留学生向けキャリア教育、インターンシップ紹介などの機会も提供する。この様に学部1～3年次に渡る継続的な国際共修教育の提供を通じて、工学系学生のグローバル視点と異文化理解・複眼的視点を定着化させる。本プログラムでの国際共修/協働学修体験を足場に、中長期留学に取り組む工学系大学院生の増加、工学系外国人学生の日本留学、国際共同研究への発展を目指す。



【養成する人材像】

本プログラムが養成を目指す人材像は、グローバル企業、政府機関、官公庁等で活躍する工学系グローバルリーダー人材である。工学者・技術者としての専門知識や語学力はもちろんのこと、異文化理解・複眼的な視点を身につけた人材を育成する。資源に乏しい日本が今後も国際競争に生き残るには、エネルギー・資源のサプライチェーンにおける国際的立ち位置を理解し、価値観を共有する国々との相互理解と信頼・協調関係を築くことが不可欠である。本プログラムでは、エネルギー・鉱物資源の豊富な豪州・米国・タイの大学との間で、カーボンニュートラルやSGDsなど世界的課題解決をテーマに国際共修/共同学習体験、学生ワークショップを実施することで、異文化理解のみならず、両国間の産業構造や科学的意識の違いを相互理解する場としたい。本プログラムを、卒業研究の開始直前(学部3年)まで継続して提供することで、工学系学生の潜在的な留学障壁を下げ、自らの未来像を世界に向ける“きっかけ”をつくることで、研究者としての本格的な中長期海外留学を志す大学院生・若手研究者を増やし、グローバル視野で活躍できる工学系リーダー人材の養成に務める。また外国人学生に向けては、複数のグローバル企業（建築、市民工学、電気電子、機械、応用化学、情報工学などの分野）等での短期研修、分野マッチングの機会を充実させることで、日本への研究留学や日本企業就職の足がかりとなる機会を提供する。

【本事業で計画している交流学生数】 各年度の派遣及び受入合計人数（交流期間、単位の取得の有無は問わない）

(単位：人)

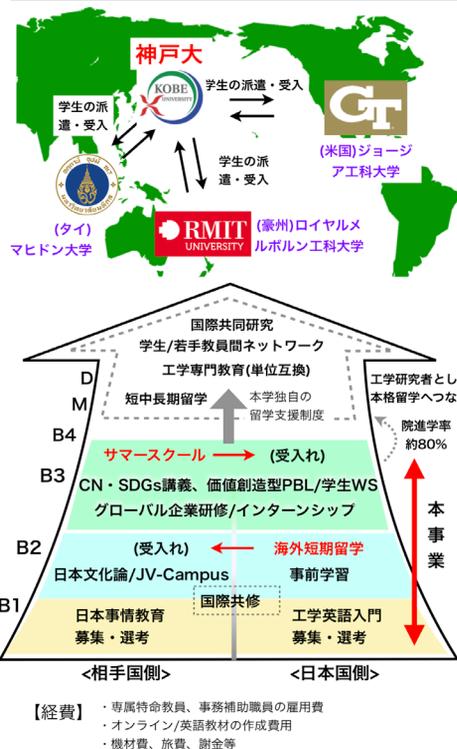
2022年度		2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
派遣	受入								
15	20	20	20	20	20	22	20	23	20

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

② 事業の概念図 【1ページ以内】

大学の世界展開力 強化事業 ～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～ 

CN, SDGs\*など世界的課題解決をテーマに工学的視点から国際共修/協働学修体験を継続的に実施する教育環境を整備し、複眼的視野とリーダーシップをもつ次世代工学系グローバル人材を養成する。



【アウトカム (成果目標)】

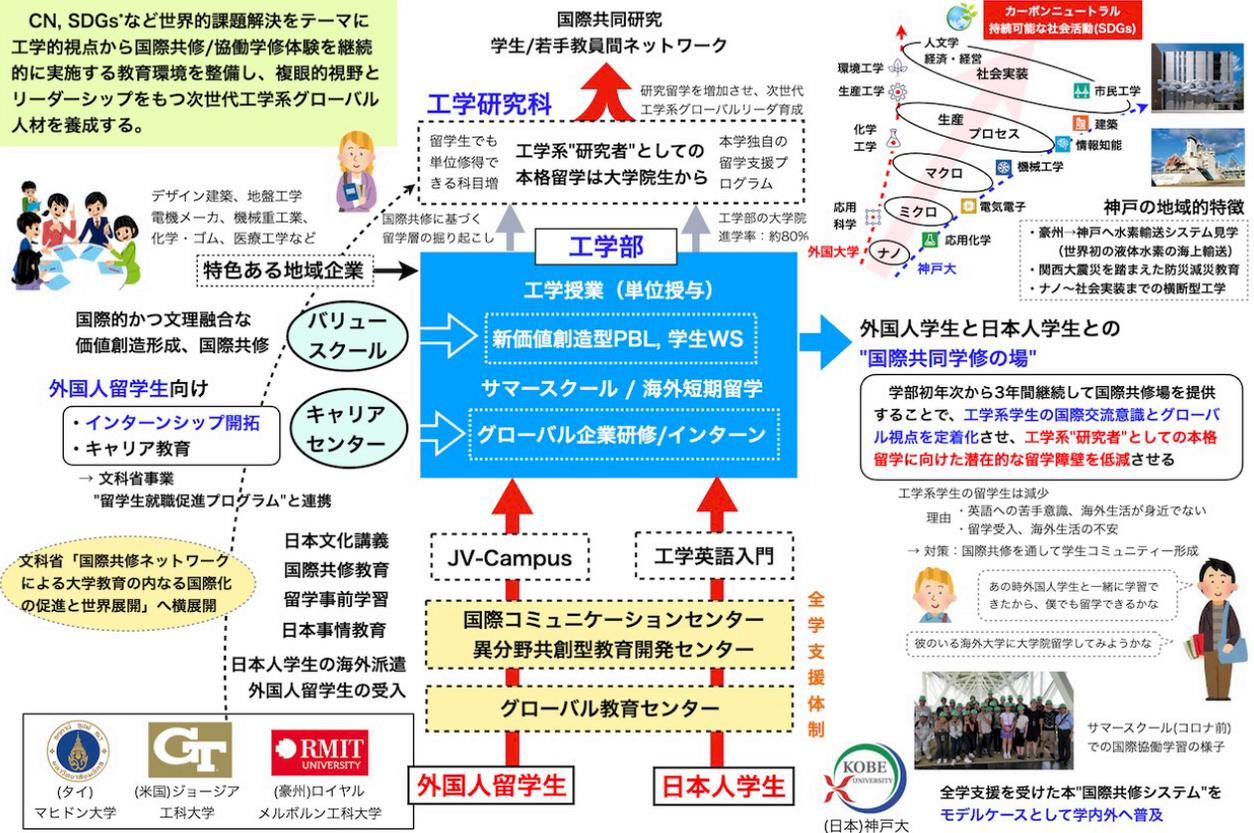
- 世界的課題の解決をテーマに、国際共修教育/協働学修体験を実施することで異文化理解を深め、複眼的視野をもつ次世代工学系グローバル人材を養成
- グローバル展開する国内企業での協働研修、学生ワークショップでの議論を通して、自ら考え行動できる力、リーダーシップの育成
- 複数年(学部3年間に)渡る継続的な国際共修プログラムを通じて、工学系学生の国際交流意識とグローバル視点を定着化させる
- 本事業での短期留学経験を足場に、神戸大独自の留学支援制度 "プレミアムプログラム"の活用拡大を促し、中長期留学に取り組む工学系大学院生増を目指す
- グローバル企業研修などを通じた工学系外国人学生の日本留学に向けた動機付け
- 全学支援を受けた"国際共修システム"をモデルケースとして学内外へ発信・波及

【事業概要】

- 日本と豪州、米国、タイの間で、国際共修/協働学修体験などの学生交流プログラムを全学支援のもと構築 (単位授与/認定、質の保証)
- 工学系日本人学生の留学"派遣"とサマースクールを通じた外国人学生"受入"をパッケージ化し、バランスの取れた学生交流を実施  
(予定総数: 派遣100人/受入100人、実渡航を予定、実施部局: 工学部)
- 日本人学生選抜には、英語外部試験を活用 (→TOEIC平均スコア: 700点) 加えて、海外での工学系英語講義に必要な Engineering English を必修化
- 世界的課題解決に向けた国際協働学習プログラムを開催 <パターンB>  
・グローバル企業見学研修/国際インターンシップ  
(予定総数: 開催数15~25回、人数200人程度、参加国: 豪/米/アジア他)  
・価値創造型PBL/学生ワークショップ (予定総数: 5回)  
・文科省"国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の促進と世界展開"への横展開  
・CN, SDGsに関する先端工学講義、阪神淡路大震災の経験に基づく防災・減災講義
- 優秀な留学生の獲得に向けて日本事情/日本文化/語学に関する教育基盤を整備

大学の世界展開力 強化事業 ～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～ 

CN, SDGs\*など世界的課題解決をテーマに工学的視点から国際共修/協働学修体験を継続的に実施する教育環境を整備し、複眼的視野とリーダーシップをもつ次世代工学系グローバル人材を養成する。



(大学名: 神戸大学) (主な交流先: オーストラリア)

③ 国内大学等の連携図 【1ページ以内】

該当なし

④-1 交流プログラムの内容 【3ページ以内】

【実績・準備状況】

○交流プログラムの基本的な枠組み

本プログラムを主担当する本学工学部は、6年間にわたり課題発見/解決型グローバル人材育成プログラムであるGCP(グローバル・チャレンジ・プログラム;海外協定校派遣型)を実施してきた。これまでに、オーストラリア、スウェーデン、台湾等の外国大学に、70人程度の学生を派遣してきた実績がある。また米国・ジョージア工科大学からは工学教育プログラムの提供を受け、外国人学生と共に国際共修に取り組んだ(単位認定)。更に工学部は独自に国際サマースクールを企画・運営しており、総計64人の外国人学生を受け入れてきた実績をもつ。

本プログラムは、これら実績ある工学部GCPと国際サマースクールで培ってきたグローバル人材育成活動をベースに、神戸大学内の全学教育センター群(グローバル教育センター、国際コミュニケーションセンター、異分野共創型教育開発センター、キャリアセンター、バリュースクール)による全学支援体制を整備し、学内外に波及しうる国際共修/協働学修体験型の交流プログラム構築を目指す(「パターンB」での実施)。

本プログラムにおける、全学支援体制、部局・センターの主な役割分担は、以下の通りである。

<グローバル教育センター>

留学生の派遣/受入、留学事前教育、日本事情学習

<国際コミュニケーションセンター、異分野共創型教育開発センター>

工学英語入門、英語プレゼン指導、JV-Campusコンテンツ提供(SDGs、震災復興など)

<キャリアセンター>

外国人学生向けキャリア教育、国内企業インターンシップ紹介

<バリュースクール>

新価値創造型PBL、学生ワークショップ世話人

<工学部>

グローバル企業研修、短期留学派遣、外国人留学生短期受入(サマースクール開催)

CN/SDGs講義、全体統括

特に、異分野共創型教育開発センター及びグローバル教育センターでは、本申請とも関連深い文科省「国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の促進と世界展開」(主幹校：東北大)にも参画しており、相互に連携しながら国際共修コンテンツの開発に取り組んでいく。本プログラムは、神戸大学が掲げる第4期中期目標・中期計画で掲げている国際共同教育の充実、海外派遣学生増、国際共同研究・国際共著論文増にも合致しており、全学的な責任・協力体制の下で、本プログラムを実施する。

本交流プログラムは、神戸大学工学部にて6年間に渡り実施してきた海外協定校派遣型GCPや国際サマースクールをベースとしており、工学英語入門、グローバルチャレンジ実習などの形で従来から講義提供しており、シラバス作成、事前/事後学修、自己評価・ルーブリック評価、学生アンケートによる学修内容改善など、質の保証を重視した教育プログラムとして展開してきた。本交流プログラムにおいても、質の保証が伴った講義群をより一層充実させ、両国相互での単位認定、修了証の発行などを行う予定である。

またコロナ禍への対策としては、昨年、一昨年のコロナ禍においても、オンライン講義として豪州・RMITからの工学英語科目の遠隔講義、米国・ジョージア工科大学とのSDGsグループワーク、OECD(経済協力開発機構)とのオンライン討論、グローバル企業とのオンライン研修などに実績を有しており、新型コロナウイルス感染症の影響の有無に関係なく、国際共修/協働学習体験プログラムを安定的に提供できることから、その準備は万端である。

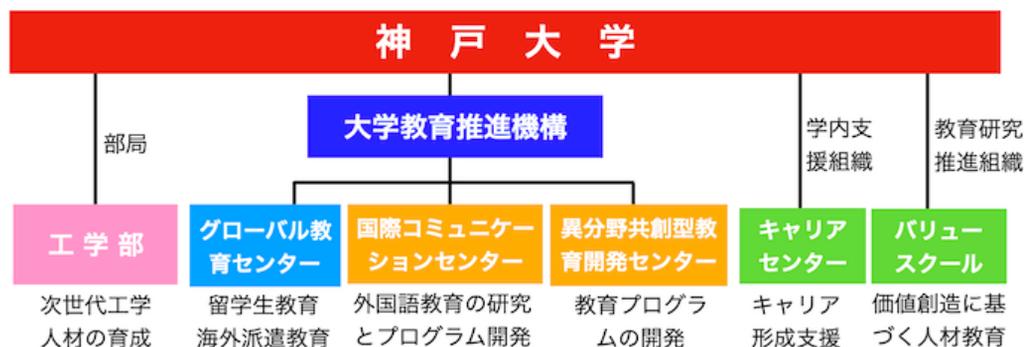


図. 神戸大学内における関連組織の位置づけ

**【計画内容】**

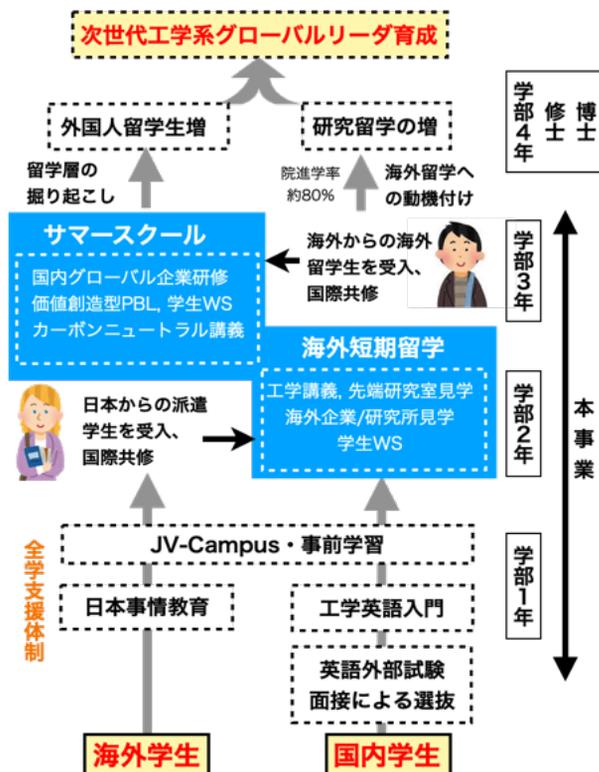
本プログラムに参加する学生は、まず所属先大学でプログラム募集に応じた者から選抜される。本学では、工学部1年生を対象に英語外部試験（TOIEC平均700程度）と面接により、語学力とグローバルイシューへの関心並びに国際教育プログラムへの参加意欲などを総合的に判断して選抜する。

**学部1年次**には、海外留学先での工学系英語講義に備えるべく、工学的な専門英語（数学・物理・化学分野におけるテクニカルターム）や活用法を身につける「工学英語入門」等を履修、単位取得させる。

**学部2年次**には、JV-Campusなどを通じて留学前オンライン学習に取り組むと共に、安全教育や派遣先での学修計画について事前学修を行い、語学力と学修計画を派遣先が求めるレベルまで高める。本予算により専門教員を配置し、派遣先での行動計画をレベルアップさせるための自主ゼミナール等をアレンジし、学生に対する助言指導を行うとともに、派遣先での本格的な学修前に語学面を含む準備をサポートする。チャレンジターム（夏季休暇）には、国内学生を海外短期留学派遣（総計100名程度）し、派遣国大学での工学英語講義の受講や工学系研究室の見学、相手国企業の見学・研修等を行い、異文化理解と工学的なグローバル視点の獲得を促す。例えばオーストラリアでは、オーストラリア連邦科学産業研究機構(CSIRO)の見学（実績あり）や国際共修などを計画しており、現地研究者/企業人との国際交流の中で、科学技術を兼ね備えた資源国（豪州）と資源に乏しい日本との産業構造の違いを知り、相手国との相互理解や協調関係の必要性を理解できるリーダー人材の育成を目指す。また米国・ジョージア工科大学から工学系英語講義の提供を受け、派遣された外国人学生と共に、国際共同学修を行う。

**学部3年次**には、外国人学生の短期留学を受入れ（総計100名程度）、日本国内での国際共修/協働学修体験を行う。工学系企業インターンシップには業種マッチングが不可欠であるため、神戸地域で世界的に活躍する地域企業群（建築、デザイン、地盤工学、電機メカ、機械、重工業、ゴム化学工業、情報、医療工学など）に協力を仰ぎ、外国人学生のグローバル企業研修に取り組む。国内学生も参加させ、国内グローバル企業の業態や業務内容などを、両国間学生で国際協働学修体験する。またカーボンニュートラルやSGDsなど世界的課題解決をテーマに新価値創造型PBLや学生主催ワークショップを実施することで、異文化理解のみならず、両国間の産業構造や科学意識の違いを相互理解する場としたい。資源の乏しい日本が国際競争を生き抜くには、エネルギー・資源のサプライチェーンにおける日本の立ち位置を工学者として理解し、価値観を共有する国々と共に発展するための協調関係、連携強化が不可欠であることに気づきを持たせるプログラムとしたい。

上記のように、本プログラムは複数年（学部3年間）に渡る継続的な国際共修プログラム提供を通じて、工学系学生の国際交流意識とグローバル視点の定着化を目指す。これら国際共修、短期留学派遣の経験を経場に、本格的な研究留学となる大学院での中長期留学に挑戦する意欲ある学生を育成したい。



(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

## ④-2 学生主体の国際交流プログラム 【1ページ以内】

## 【実績・準備状況】

本学では、学生主体の国際交流プログラムとして Accelerated Course in English(ACE)Student Conference 「学生会議2022」や神戸大学×国立台湾大学 国際学生シンポジウムなどが開催されており、**学内にはその実績とノウハウが蓄積されている。**神戸大学工学部で実施してきた海外派遣型グローバル・チャレンジ・プログラム(GCP)においても、**相手国を訪問した際に両国の文化・風土を相互に紹介したり、学生が所属する工学部各学科の先端研究事例を紹介する学生交流会、ワークショップを開催してきた実績がある。**これらの企画、運営、司会等については両国学生が自主的に取り組み、紹介する研究内容についても学生間で議論して決定している。過去、工学部GCPに参加した学生によると、学部時代に構築したこれら両国学生間ネットワークは大学院生になった今でも継続しており、国際共同研究につながる可能性を大いに秘めている。

**本プログラムでは、全学支援体制の構築によって、学生主催ワークショップを効果的に開催できるよう工夫していく予定である。**例えば、国際コミュニケーションセンターからは英語ネイティブ教員による学生WSに必要な英語プレゼンテーション、バリュースクールからは学生ワークショップの企画・運営ノウハウやグループワーク進行方法などを事前学習いただく予定である。バリュースクールでは、文部科学省次世代アントレプレナー人材育成事業(EDGE-NEXT)の一環で2019年度から「レジリエント社会の構築を牽引する起業家精神育成プログラム」を実施している。このプログラムは、特に自然災害に対する防災・減災に資する新規事業をグループワークやフィールドワークを通じて立案するワークショップである。2021年度は英語で実施し、日本人学生と外国人留学生とがオンラインにて共修できる環境を整備した。さらに、2021年度に文部科学省START大学・エコシステム推進型スタートアップ・エコシステム形成支援事業の一環で、課題解決型学習(Project-Based learning:PBL)「未来社会のエネルギー」を試行し、カーボンニュートラルを視野に入れたエネルギー問題に関するワークショップの提供を開始している。これら実績を活かして、**両国学生自らが国際交流プログラム、学生ワークショップを効率的に企画、運営できる仕組みとカリキュラム体制を準備する。**

## 【計画内容】

学生が主体となって国際ワークショップを企画、運営するための事前学習・準備学習として

- (1)英語プレゼンテーション能力の育成(神戸大学 国際コミュニケーションセンター)
- (2)英語による新価値創造型PBLの受講(神戸大学 バリュースクール)

を行う。選考された日本人学生が学部2年次に、パワーポイントを用いた英語プレゼンテーション方法の習得につとめる。また、学部3年次に外国人学生が日本へ短期留学してきた際には、両国学生にて新価値創造型PBLを受講する。ファシリテータを務める教員の指導のもと、両国学生が混在したグループワークを実践し、国際共修の場とする。特にバリュースクールには文系学生が多く参画していることから、文系学生にも参加を呼びかけ、国際的かつ文理融合型PBLとして、専攻分野の異なる学生の意見も受け止め、理解する機会としたい。世界的課題であるカーボンニュートラル、SDGsをテーマとすることで、住んでいる国や文系・理系を問わず、学生自らが課題解決の意識を持って学習に取り組めるのではないかと期待する。これらの準備学習を経たのち、学生ワークショップの開催を促す。

学生ワークショップの開催にあたっては、両国間の歴史・文化、社会構造、産業構造等の違いを相互理解する場としたい。資源の乏しい日本が国際競争を生き抜くには、**エネルギー・資源のサプライチェーンにおける日本の立ち位置を工学者として理解し、価値観を共有する国々と共に発展するための協調関係、連携強化が不可欠であることに気づきを持たせるプログラムとしていく。**

(大学名: 神戸大学) (主な交流先: オーストラリア)

## ④-3 オンライン（「JV-Campus」等）を活用したプログラム 【1ページ以内】

## 【実績・準備状況】

令和6年度までのコンテンツ提供に向けて、学内組織からのコンテンツ提供、提供内容の議論をスタートしている。現在のJV-Campusにて提供数が少ない先端工学分野での講義提供に加えて、外国人留学生在が来日初期に必要な日本事情に関する講義科目の提供なども検討している。海外連携大学からの提供講義としては、豪州・RMIT及び米国・ジョージア工科大学の担当教員との間では、コンテンツ提供に向けての合意形成がなされつつある。

また、神戸大学は、東北大学が主幹校として採択された文部科学省「国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の促進と世界展開」プログラムに参画しており、当該プログラムの横展開・波及効果としてもJV-Campusへの講義コンテンツの提供を行っていく予定である。これらの科目群は、公開を前提としており、自大学および連携大学以外の大学が利用できる形で、コンテンツ提供を行う予定である。

## 【計画内容】

現在、JV-Campusへの提供予定コンテンツとしては、

- (1) カーボンニュートラル講義（神戸大学工学部）
- (2) SDGsに関連する化学工学に関連する講義（豪州・RMIT）
- (3) 市民工学に関連する国際連携講義（米国・ジョージア工科大学、神戸大学工学部）
- (4) 外国人学生の受入初期に必要な「日本事情」（神戸大学グローバル教育センター）
- (5) SDGs、震災復興などに関連する国際共修コンテンツ（神戸大学異分野共創型教育開発センター・グローバル教育センター）

を計画している。

(5)は前述した東北大学が主幹校として採択された文部科学省「国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の促進と世界展開」にも関連する提供予定科目であり、自大学と海外連携大学以外の大学でも利用可能なコンテンツとして提供予定である。令和6年度までのコンテンツ提供に向けて、採択初年度（令和4年度）には学内および相手国教員との調整、議論を深め、コンテンツ作成に向けた計画を明確化し、令和5年度末には(1)カーボンニュートラル講義、(4)日本事情学、(5)SDGs、震災復興などに関連する国際共修コンテンツをJV-Campusへ提供予定である。令和6年度末までに(2)SDGsに関連する化学工学に関連する講義、(3)市民工学に関連する国際連携講義の提供を行う計画としている。

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

⑤ 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成 【4 ページ以内】

【実績・準備状況】

○質保証・成績評価と単位互換

豪州・ロイヤルメルボルン工科大学、米国・ジョージア工科大学、タイ・マヒドン大学は、それぞれ各国の工学系大学としてはトップレベルの大学であり、世界大学ランキングも上位に位置する。各大学の履修コースのカリキュラムの水準、成績・単位の認定基準等について協議を進めている。原則的には、各大学の講義科目を履修した学生の成績については、各大学が自国の基準に基づき評価・単位認定を行う予定である。また従来実施してきた神戸グローバル・チャレンジ・プログラム(GCP)での単位認定には、ルーブリック評価等を用いた到達目標の達成水準を明確化し、工学部内全学科の教務委員から構成される教務委員会において単位認定に関する議論と点検を行ってきたので、本プログラムでも継続する予定である。参加学生の単位数設定や学修目標、出口管理などは、従来から各学科の担任制面談の中での確かな教育指導を行っている。本プログラムでは、幾つかの国際共修講義をプログラムコースとして計画的に履修することになるので、学修内容の修了判定を経たうえで、コース修了証を交付する予定である。また各年度のプログラム実施実績については、他部局を含むプログラム検討委員会を開催し、プログラム実施状況と教育内容に関する点検評価を行う計画である。

○質の高い教育を提供するための教育体制の充実

神戸大学工学部では、各学科教員から構成される教務委員会を毎月開催しており、その中で随時本プログラムの実施状況や達成度、問題点を情報共有・議論することで、プログラム内容の随時点検と迅速な改善に取り組む予定である。また本プログラムに適したサポート体制を構築し、大学内外の関係教職員や受入学生との意思疎通を円滑に行うために、特命教員（講義・学生指導に加えて、プログラム運営、および実務的な調整・交渉を担当）、事務補佐員（多数の学生を継続的に派遣・受入れることで増大する事務作業を教務・総務両面で補佐し、制度面・生活面でのサポートを行う）を雇用し、万全の支援体制を整備する。

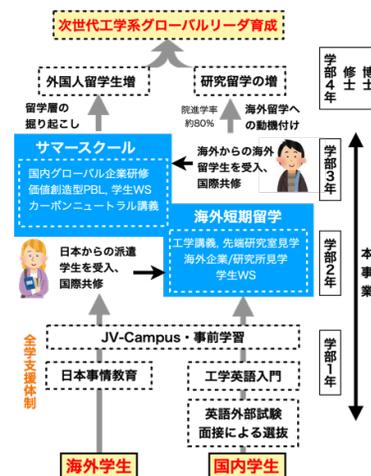
【計画内容】

本プログラムは、参加学生の自国内における対面講義とオンライン型学習の併用と、実渡航による短期海外留学経験を基軸とし、質の保証を伴った国際共修プログラムとして大学間交流を推進する。今後、成績評価を行う各大学の教員間の情報交換や連携を強化し、共同の授業運営や指導体制の構築など、質の保証を伴いながら国際交流内容の充実と成績評価基準の統一を進める。またシラバス可視化を推進する。各大学の英語版シラバスの可視化によって、講義情報のフォーマット共通化を検討し、本プログラムの取り組みがより分かりやすく公表されることを目指す。これらを通じ、参加学生が自国出発前に派遣先大学の講義内容を容易に把握できたり、成績評価や単位認定作業も基準化されることが期待される。

本プログラムは、単なる語学留学にとどまらず、両国学生が共に学び、体験する形で国際協同学習体験プログラムを実施する（グローバル企業研修/インターンシップ、PBLや学生ワークショップなど）。世界で活躍する神戸地域のグローバル企業と連携し、グローバルな事業展開、国際展開を視野に入れたビジネス視点、世界に誇る先端工学技術などを紹介しあい、工学系グローバル視点の獲得を目指す。併せて、カーボンニュートラルやSDGsなどの世界的解決課題に向けた企業での取り組みや阪神淡路大震災での経験を踏まえた防災減災技術等について実践的に学ぶ。国際共修後は企業技術者のヒアリング調査を行い、プログラム内容の改善点を洗い出し、修正するなど、質の保証と向上に努める。また本学キャリアセンターにて採択された文科省「留学生就職促進プログラム」と連携し、外国人学生へのキャリア教育、インターンシップ紹介なども行う。

本プログラムの特徴は、学部1～3年にわたる継続的な国際共修プログラムの提供であり、工学系学生のグローバル視点と異文化理解能力の定着化を目指している。工学部での大学院進学率は約80%であることを踏まえると、プログラム修了生の大学院でのグローバルリーダ活動、中長期留学への取り組みなども追跡調査可能であることから、本プログラムの有効性や効果的な教育コンテンツを明らかにし、学修内容の質の向上に取り組んでいく。

この2年間における新型コロナウイルス感染症まん延時の講義対策経験から、学生が実渡航できなかった場合でもオンライン型国際共修講義を増設することで、これまでの教育の質を保ったまま学生に教育を提供することができる。



(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

## 達成目標 【①～④合わせて7ページ以内】

## ① 将来の関係を見据えた連携強化に資する目標について

## (i) 事業計画全体の達成目標(事業開始～2026年度まで)

本プログラムは「複眼的視野とリーダーシップをもつ次世代工学系グローバル人材」の養成を目指すものである。カーボンニュートラルやSDGsなどの世界的課題に対して、工学的な視点から論理的に分析し、国際的な大学間の協力/連携体制のもと、主体的に考え行動できる次世代グローバルリーダー人材の育成を目指すものである。工学的視点で俯瞰すると、それぞれの国のエネルギー・資源のサプライチェーンを理解し、価値観を共有する国々が共に発展していく仕組み作りが必要であろう。本プログラムでは、これら次世代にむけた価値観を共有し、国際連携の必要性を理解するための国際共修、学生ワークショップ等を国内大学および海外大学にて開催することで、両国学生間相互理解を深めると共に、大学間連携をも強化して行く。本プログラムへの学生参加人数は、総計で国内学生100名程度、海外学生100名程度以上を目標とし、工学分野における国際共同研究への進展も期待できよう。また豪州ではロイヤルメルボルン工科大学(RMIT)のみならず、西オーストラリア大学などへの横連携についても検討したい。

## (ii) 中間評価までの達成目標(事業開始～2023年度まで)

本プログラムは、短期集中型ではなく、3年間(学部1-3年)に渡る継続的プログラムとすることで異文化理解とグローバル視点を定着化させる狙いがある。2023年度末は1期生もプログラム修了できておらず、学生に関わる達成指標は設定しにくい状況にあるが、本プログラムの全学支援体制を充実させるとともに、本プログラムへの学生参加人数を35名以上とすることを旨とする。

## ② 養成しようとするグローバル人材像について

## (i) 事業計画全体の達成目標(事業開始～2026年度まで)

本プログラムが養成しようとする人材像は、グローバル企業、政府機関、官公庁等で活躍する工学系グローバルリーダー人材である。具体的には、工学者・技術者としての専門知識や語学力はもちろんのこと、エネルギー・鉱物資源のサプライチェーンにおける日本の国際的立ち位置をも理解し、価値観を共有する国と双方共に発展していくために必要な異文化理解・複眼的な視点を身につけた工学系グローバルリーダーを育成する。

本プログラムを通じて、諸外国の言語・社会に対する理解と、工学分野の現場においてグローバルに活躍しうる経験とスキルを身につけた人材を育成し、世界的に事業展開するグローバル企業、政府機関、官公庁等で活躍できる人材を養成する。

## (ii) 中間評価までの達成目標(事業開始～2023年度まで)

本プログラムは、短期集中型ではなく、3年間(学部1-3年)に渡る継続的プログラムとすることで異文化理解とグローバル視点を定着化させる狙いがある。2023年度末は1期生もプログラム修了できておらず、学生に関わる達成指標は設定しにくい状況にあるが、本プログラムの全学支援体制を充実させるとともに、本プログラムへの学生参加人数を35名以上とすることを旨とする。

③-1 学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする日本人学生数の推移について

(i) 本事業計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

単位：人（延べ人数）

	外国語力基準	達成目標	
		中間評価まで (事業開始～ 2023年度まで)	事後評価まで (事業開始～ 2026年度まで)
	【参考】本事業計画において派遣する日本人学生合計数	40人（延べ数）	100人（延べ数）
1	TOEICのスコア700点	35人（延べ数）	100人（延べ数）
2	「工学英語入門」の単位獲得	35人（延べ数）	100人（延べ数）
3			

(ii) 外国語力基準を定めた考え方

外国語力としては、世界的標準言語として英語を選択した。本学では、全学部・全学科の学部1年生を対象に、無償のTOEIC受験の機会を提供していることから、学生の金銭的負担なく平等に受験チャンスがあるTOEICを試験対象とした。本プログラム申請の雛形である神戸大学グローバル・チャレンジ・プログラム(GCP)における工学部参加者のTOEIC平均値から700点として設定した。総合的な英語力をTOEICにて担保した上で、工学分野における特殊な専門用語や言い回しを理解・活用するための「工学英語入門」の履修を必修化することとした。

(iii) 事業計画全体の目標達成に向けたプロセス（事業開始～2026年度まで）

外国語力（英語）については、3年間（学部1年～3年）に渡る継続的な学修の中で、工学英語力や議論力の定着を目指していく予定である。1年目は、工学分野における特殊な専門用語や言い回しを理解・活用するための「工学英語入門」の履修を必修化し、そのほか英語プレゼンテーション能力を身につける講義群（ACEプログラムなど）の履修を促す。2年目には、海外留学派遣（実渡航）にて相手国大学での工学系講義や先端研究所の見学会に参加し、英語での工学講述内容の聞き取り能力の確認と英語力習得にむけた同期づけとする。3年目は、サマースクールを通じた海外留学生の受け入れにより、共に国際共修科目（カーボンニュートラル講義や学生ワークショップ）を学び、グローバル企業研修にて国際協働学習に取り組むことで、生きた英語能力の獲得を促す。これら3年間に渡って英語で工学知識を学ぶ機会を持つことで、工学英語力の定着化を目指す。これら工学英語の習得システムを、年次進行的に繰り返すと共に、効率的に工学英語能力の獲得できるよう改良を重ねていく。

(iv) 中間評価までの目標達成に向けたプロセス（事業開始～2023年度まで）

英語については、学部初年次（2022年度）に工学分野における特殊な専門用語や言い回しを理解・活用するための「工学英語入門」の履修を必修化すると共に、英語プレゼンテーション能力を身につける講義群（ACEプログラムなど）の履修を促す。学部2年次（2023年度）には海外留学派遣にて、相手国大学での工学系講義や先端研究所の見学会に参加し、英語での工学的講述内容の聞き取り能力の確認と能力向上に向けたきっかけとする。学部3年次（2024年度）にはサマースクールを通じて海外留学生を受け入れた際に実施予定である国際共修科目（カーボンニュートラル講義や学生ワークショップ）において議論に参加できる程度の語学力を身につける。

## ③-2 学生に修得させる具体的能力のうち、「③-1」以外について

## (i) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

日本における工学的な専門知識のみならず、地政学・資源・歴史・文化の異なる海外諸国での科学技術のあり方、日本との違いを相互に理解し、工学分野における異文化適応能力を身につける。更に、エネルギー・資源のサプライチェーンにおける日本の国際的な立ち位置を理解し、諸外国との連携強化に向けて主体的に考え、行動できるリーダーシップを修得させることを目指す。具体的には、本交流プログラム参加学生が、将来、大学院に進学した際（工学部では大学院進学率：80%程度）、積極的に先端的な工学研究に取り組むと共に、国際的な学術論文誌（Web of Science論文など）の執筆、国際共同研究や中長期の本格研究留学などに、積極的に取り組む学生の育成を目標とする。これら国際共修や留学による留学による成長のプロセスや成果を捉えるために、分析ツールThe Beliefs, Events, and Values Inventory-Japan(BEVI-J)を導入し、リーダーシップ・プログラムやメンタル・ヘルスなどを見える化し、本事業の達成目標である工学分野における異文化適応能力やリーダーシップの獲得度を把握すると共に、随時、実施プログラムの改良を重ねていく。

## (ii) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）

2022年度（学部1年）および2023年度（学部2年）に実施予定である「工学英語入門」や事前学修等を通して、日本における工学的な専門知識のみならず、地政学・資源・歴史文化の異なる海外諸国での科学技術のあり方、日本との違いを相互に理解すると共に、2023年度に予定している「海外短期留学」においては海外大学にて英語での工学講義に参加したり、海外大学の理工系研究室の見学、国際学生ワークショップなどを通して科学技術分野における異文化適応能力を身につける。

## ④ 質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組について

## (i) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

## 1. シラバスの可視化の推進

英語版シラバスを作成、公開することで、相手国大学との情報共有を行い、一体感のあるプログラム運営に取り組む。

## 2. 工学英語入門、留学前安全教育、国際共修科目など

本プログラムでは、留学前の事前学習・国際共修として、工学英語入門、留学前安全教育、日本事情教育などの講義科目の提供、短期留学派遣/受入、グローバル企業研究や学生WS開催などが予定されている。これら日本国内での学修内容については、相手国担当教員との間で情報共有を図り、その教育内容について定期的に点検、相互に議論することによって、質の保証の伴った大学間交流とする。原則的に、各大学の講義科目を履修した学生の成績については、各大学が自国の基準に基づき評価・単位認定を行う予定であるが、その成績管理においては情報共有を図り、国ごとに大きく成績がぶれないように一体感をもって単位授与する仕組みを構築する。これら英語版シラバスの公開や両国教員による講義内容の点検、単位認定についての情報共有と議論を通じて経験とノウハウを蓄積し、例えば豪州内の別大学などに横展開を図る。

## 3. 教員間の共同指導体制の強化

年1～4回程度、大学教員と事務担当者が一同に集まって実務者会議を開催し、海外大学で実施される教育項目や国内での国際共修/協働学修の中身について議論し、意見交換の機会とする。

## (ii) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）

## 1. シラバスの可視化の推進

英語版シラバスの作成、海外大学との情報共有を推し進め、質の保証が伴った講義提供に取り組む。

## 2. 工学英語入門、留学前安全教育、国際共修科目など

工学英語入門、留学前安全教育、日本事情教育など日本国内で実施する学修内容については、相手国担当教員との間で情報を共有し、その教育内容について定期的に点検、議論することによって、質の保証の伴った大学間交流とする。2023年度実施予定の短期留学派遣についても、相手国担当教員との間で情報共有を図ることで、参加講義や見学研究室の学術分野を把握することで、当該分野の専門用語を事前調査するなどの事前学習が実施可能であろう。原則的に、各大学の講義科目を履修した学生の成績については、各大学が自国の基準に基づき評価・単位認定を行う予定であるが、その成績管理においては情報共有を図り、国ごとに大きく成績がぶれないように一体感をもって単位授与する仕組みを構築する。

## 3. 教員間の共同指導体制の強化

事業開始前、開始後においては年1-4回、大学教員と事務担当者が集まって実務者会議を開催し、実施プログラムの教育項目やスケジュールについて議論し、国際共修/協働学修の中身について意見交換の機会とする。

## ⑤ 本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移【1ページ以内】

現状（2022年5月1日現在）※1 （単位：人） 0

## (i) 日本人学生数の達成目標

単位：延べ人数

事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）	100
中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）	35

## (上記の内訳)

## (ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

単位：人

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
実際に渡航する学生	0	20	20	22	23	85
自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生	15	0	0	0	0	15
実渡航とオンライン受講を行う学生	0	0	0	0	0	0
合計人数	15	20	20	22	23	100

## (a) 実渡航による交流

本プログラムは、学部1～3年次に渡って継続的に国際教育、交流プログラムを実施することで、工学系学生に異分野適応能力、グローバル視点を定着化することを目指している。学部1年次に事前学修として工学英語入門を対面受講した後、学部2年次には日本人学生を海外大学へ短期留学“派遣”、学部3年次に外国人学生の短期留学“受入”を予定している（いずれも実渡航）。外国人学生の留学受入は、神戸大学工学部で実施してきたサマースクールが雛形であるが、例年、外国人学生から募集定員を超えた応募がある。外国人学生と日本人学生との国際共修/協働学習体験、グローバル企業研修、学生ワークショップにおける効果的な国際交流人数、留学の“派遣”と“受入”の人数バランスを考慮して、各年度で平均して日本人学生20名/外国人学生20名（総計100名/100名）を目標人数として設定した。

## (b) オンライン交流

本プログラムにて交流予定の大学には、JV-Campusによるオンライン講義の提供を行う。本プログラムでは、国際教育講義、カーボンニュートラル工学講義などの提供を予定しているが、これらの講義においてオンライン交流を検討している。今後、オンライン共同教育プログラムの内容を多様化させ、より多くの実務者・研究者による講義を構築することで、充実したオンライン教育プログラムを提供する予定である。

## (c) 実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流

学内での国際教育と同時に現場での取り組みについて知ること重要である。日本人学生の短期留学派遣日程で、単位授与に必要な学修時間が確保できない場合には、オンライン講義/交流を組み合わせたハイブリッド型講義の提供を検討する。

※1 現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における2022年5月1日現在の人数。

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア)

## ⑥ 本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移【1ページ以内】

現状（2022年5月1日現在）※1 （単位：人） 0

## (i) 外国人学生数の達成目標

単位：延べ人数

事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）	100
中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）	40

(上記の内訳)

## (ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

単位：人

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
実際に渡航する学生	0	0	0	0	0	0
自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生	20	0	0	0	0	20
実渡航とオンライン受講を行う学生	0	20	20	20	20	80
合計人数	20	20	20	20	20	100

## (a) 実渡航による交流

本プログラムにおいて、相手国大学側の国際教育、交流プログラム活動としては、学部1年次に国JV-Campus等を通じて、日本事情教育、国際共修プログラムなどオンライン提供、学部2年次には日本人学生を短期留学“受入”、学部3年次に外国人学生が日本側へ短期留学“派遣”されることを予定している（いずれも実渡航）。外国人学生の留学受入は、本学工学部で実施してきたサマースクールが雛形であるが、例年、外国人学生から募集定員を超えた応募がある。外国人学生と日本人学生との国際共修/協働学習体験、グローバル企業研修、学生ワークショップ開催における効果的な国際交流人数、留学の“派遣”と“受入”の人数バランスを考慮して、各年度で平均して日本人学生20名/外国人学生20名（総計100名/100名）を目標人数として設定した。

## (b) オンラインによる交流

本プログラムにて交流予定の大学には、JV-Campusによるオンライン講義の提供を行う。本プログラムでは、日本事情学、SDGsに関する国際共修科目などのコンテンツ提供を予定しているが、これらの講義の一部においてはオンライン交流を検討している。2023年度以降は、実渡航（短期留学派遣）とオンライン講義（JV-Campusなど）の併用となるため「自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生数」はゼロとした。今後、オンライン共同教育プログラムの内容を多様化させ、より多くの実務者・研究者による講義を構築することで、充実したオンライン教育プログラムを提供する予定である。

## (c) 実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流

学内での国際教育と同時に現場での取り組みについて知ること重要である。この観点から、2023年度以降、外国人学生は「実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流」を基本とする。日本人学生の短期留学派遣日程で、単位授与に必要な学修時間が確保できない場合には、オンライン講義/交流を組み合わせたハイブリッド型講義の提供を検討する。

※1 現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における2022年5月1日現在の人数。

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

⑦ 交流学生数について（2022年度は事業開始以後の人数）

（単位：人）

(i) 本事業で計画している交流学生数

各年度の派遣及び受入合計人数 (交流期間、単位取得の有無等の内訳は (iii) 表参照)	2022年度		2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入								
	15	20	20	20	20	20	22	20	23	20	100	100
実際に渡航する学生 (以下「実渡航」)	0	0	20	0	20	0	22	0	23	0	85	0
自国にて国際教育・交流プログラム をオンラインで受講する学生 (以下「オンライン」)	15	20	0	0	0	0	0	0	0	0	15	20
実渡航とオンライン受講を行う学生 (以下「ハイブリッド」)	0	0	0	20	0	20	0	20	0	20	0	80

(ii) 国内大学及び交流プログラムごとの交流学生数

交流形態	①	単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	学生別	A	学部生	実	実渡航
	②	単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		B	大学院生		オ
	③	単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流			ハ	ハイブリッド	
	④	上記以外の交流期間30日未満の交流					
	⑤	上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流					
	⑥	上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流					

1. 【代表申請大学】

大学名				神戸大学																		合計
交流プログラム名 (相手大学名)	交流方向	交流形態	学生別	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度			2026年度						
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ				
ロイヤルメルボルン工科大学	派遣	①	A		15		15			15			15			15			75			
ロイヤルメルボルン工科大学	受入	①	A		8				8			8			8			8	40			
ジョージア工科大学	派遣	①	A										2			3			5			
ジョージア工科大学	受入	①	A		6				6			6			6			6	30			
マヒドン大学	派遣	①	A				5			5			5			5			20			
マヒドン大学	受入	①	A		6				6			6			6			6	30			

2. 【国内連携大学等】

大学名																						合計
交流プログラム名 (相手大学名)	交流方向	交流形態	学生別	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度			2026年度						
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ				
	派遣																		0			
	受入																		0			
	派遣																		0			
	受入																		0			

(iii) 本事業で計画している交流学生数（派遣・受入別 各内訳の集計）

【日本人学生の派遣】		2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
年度別合計人数	学生別	15	20	20	22	23	100
【交流形態別 内訳】							
① 単位取得を伴う交流期間30日未満の交流		15	20	20	22	23	100
	実渡航 A		20	20	22	23	85
	オンライン A	15					15
	ハイブリッド						0
② 単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
③ 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
④ 上記以外の交流期間30日未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑤ 上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑥ 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

【外国人学生の受入】		2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
年度別合計人数	学生別	20	20	20	20	20	100
【交流形態別 内訳】							
① 単位取得を伴う交流期間30日未満の交流		20	20	20	20	20	100
	実渡航						0
	オンライン A	20					20
	ハイブリッド A		20	20	20	20	80
② 単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
③ 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
④ 上記以外の交流期間30日未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑤ 上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑥ 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

(iv) 派遣・受入別 交流プログラム学生数の詳細

①日本人学生の派遣【計画】

年度	交流期間		派遣元大学	派遣先大学	派遣相手国	交流内容 (交流プログラム名等)	交流形態	学生別	交流 学生 数	(内訳)		
										実渡航	オン ライ ン	ハイブ リッド
22	2023年2月	2023年2月	神戸大学	ロイヤルメルボルン工科大学	豪州	グローバルチャレンジ実習	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	15		15	
23	2023年9月	2023年9月	神戸大学	ロイヤルメルボルン工科大学 マヒドン大学	豪州・タイ	グローバルチャレンジ実習	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	20	20		
24	2024年9月	2024年9月	神戸大学	ロイヤルメルボルン工科大学 マヒドン大学	豪州・タイ	グローバルチャレンジ実習	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	20	20		
25	2025年9月	2025年9月	神戸大学	ロイヤルメルボルン工科大学 マヒドン大学 ジョージア工科大学	豪州・タイ・米国	グローバルチャレンジ実習	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	22	22		
26	2026年9月	2026年9月	神戸大学	ロイヤルメルボルン工科大学 マヒドン大学 ジョージア工科大学	豪州・タイ・米国	グローバルチャレンジ実習	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	23	23		

②外国人学生の受入【計画】

年度	交流期間		派遣元大学	派遣相手国	派遣先大学	交流内容 (交流プログラム名等)	交流形態	学生別	交流 学生 数	(内訳)		
										実渡航	オン ライ ン	ハイブ リッド
22	2023年2月	2023年2月	ロイヤルメルボルン工科大学 ジョージア工科大学 マヒドン大学	豪州・米国・タイ	神戸大学	Kobe Engineering Summer School (オンライン説明と事前学習)	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	20		20	
23	2023年7月	2023年7月	ロイヤルメルボルン工科大学 ジョージア工科大学 マヒドン大学	豪州・米国・タイ	神戸大学	Kobe Engineering Summer School	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	20			20
24	2024年7月	2024年7月	ロイヤルメルボルン工科大学 ジョージア工科大学 マヒドン大学	豪州・米国・タイ	神戸大学	Kobe Engineering Summer School	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	20			20
25	2025年7月	2025年7月	ロイヤルメルボルン工科大学 ジョージア工科大学 マヒドン大学	豪州・米国・タイ	神戸大学	Kobe Engineering Summer School	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	20			20
26	2026年7月	2026年7月	ロイヤルメルボルン工科大学 ジョージア工科大学 マヒドン大学	豪州・米国・タイ	神戸大学	Kobe Engineering Summer School	①：単位取得を伴う 交流期間30日未満の交流	A	20			20

(大学名： 神戸大学) (主な交流先： オーストラリア)

## ⑧ 海外相手大学との単位互換について

## (i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位：校)

単位互換を実施する 海外相手大学数	2022年度		2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入								
	1	3	2	3	2	3	3	3	3	3	11	15

## (ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

## 【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

## 1. 代表申請大学 【大学名：神戸大学】

相手大学名		学生 別	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	合計
ロイヤルメルボルン工科大学	認定者数	A	15	15	15	15	15	75
ロイヤルメルボルン工科大学	認定単位数	A	2	5	5	5	5	22
ジョージア工科大学	認定者数	A	0	0	0	2	3	5
ジョージア工科大学	認定単位数	A	0	0	0	5	5	10
マヒドン大学	認定者数	A	0	5	5	5	5	20
マヒドン大学	認定単位数	A	0	5	5	5	5	20
年度別認定者数合計			15	20	20	22	23	100
年度別認定単位数合計			2	10	10	15	15	52

## 2. 国内連携大学 【大学名： 】

相手大学名		学生 別	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	合計
	認定者数							0
	認定単位数							0
	認定者数							0
	認定単位数							0
	認定者数							0
	認定単位数							0
年度別認定者数合計			0	0	0	0	0	0
年度別認定単位数合計			0	0	0	0	0	0

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先 オーストラリア )

## ⑨ 学生主催イベント・ワークショップの開催数、参加規模について。

	イベント・ワークショップ名	開催年月	開催回数	参加人数	参加国
1	Student workshop: comparison on carbon-neutral societies	2023年7月～8月	1	65	日・豪州・タイ・米 国・尼・馬・仏、等
2	Student workshop: comparison on carbon-neutral societies	2024年7月～8月	1	65	日・豪州・タイ・米 国・尼・馬・仏、等
3	Student workshop: comparison on carbon-neutral societies	2024年7月～8月	1	65	日・豪州・タイ・米 国・尼・馬・仏、等
4	Student workshop: comparison on carbon-neutral societies	2024年7月～8月	1	65	日・豪州・タイ・米 国・尼・馬・仏、等

(大学名： 神戸大学

) (主な交流先

オーストラリア

)

⑩ インターンシップの実施計画について（2022年度は事業開始以後の人数）

（単位：人）

(i) 本事業で計画している交流学生のうちインターンシップに参加する学生数

各年度の派遣及び受入合計人数 (交流期間、単位取得の有無等の内訳は (iii) 表参照)	2022年度		2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入								
	0	0	20	10	20	10	22	10	23	10	85	40
実際に渡航する学生 (以下「実渡航」)	0	0	20	0	20	0	22	0	23	0	85	0
自国にてインターンシップをオンラインで受講する学生 (以下「オンライン」)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
実渡航とオンライン受講を行う学生 (以下「ハイブリッド」)	0	0	0	10	0	10	0	10	0	10	0	40

(ii) 国内大学及びプログラムごとのインターンシップに参加する学生数

交流形態	①	単位取得を伴う交流期間30日未満の交流	学生別	A	学部生	実	実渡航
	②	単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		B	大学院生		
	③	単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流			ハ	ハイブリッド	
	④	上記以外の交流期間30日未満の交流					
	⑤	上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流					
	⑥	上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流					

1. 【代表申請大学】

大学名				神戸大学																		合計
プログラム名 (相手大学名)	交流方向	交流形態	学生別	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度			2026年度						
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ				
ロイヤルメルボルン工科大学	派遣	①	A	0	0	0	15	0	0	15	0	0	15	0	0	15	0	0	60			
ロイヤルメルボルン工科大学	受入	①	A	0	0	0	0	0	4	0	0	4	0	0	4	0	0	4	16			
ジョージア工科大学	派遣	①	A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3	0	0	5			
ジョージア工科大学	受入	①	A	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	0	3	0	0	3	12			
マヒドン大学	派遣	①	A	0	0	0	5	0	0	5	0	0	5	0	0	5	0	0	20			
マヒドン大学	受入	①	A	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	0	3	0	0	3	12			

2. 【国内連携大学等】

大学名																						合計
プログラム名 (相手大学名)	交流方向	交流形態	学生別	2022年度			2023年度			2024年度			2025年度			2026年度						
				実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ	実	オ	ハ				
	派遣																		0			
	受入																		0			
	派遣																		0			
	受入																		0			

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

(iii) 本事業で計画している交流学生のうちインターンシップに参加する学生数（派遣・受入別 各内訳の集計）

【日本人学生の派遣】		2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	合計
年度別合計人数	学生別	0	20	20	22	23	85
【交流形態別 内訳】							
① 単位取得を伴う交流期間30日未満の交流							
	実渡航 A	0	20	20	22	23	85
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
② 単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流							
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
③ 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流							
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
④ 上記以外の交流期間30日未満の交流							
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑤ 上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流							
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑥ 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流							
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0

(大学名： 神戸大学 ) (主な交流先： オーストラリア )

【外国人学生の受入】		2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
年度別合計人数	学生別	0	10	10	10	10	40
【交流形態別 内訳】							
① 単位取得を伴う交流期間30日未満の交流		0	10	10	10	10	40
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド A	0	10	10	10	10	40
② 単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
③ 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
④ 上記以外の交流期間30日未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑤ 上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0
⑥ 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流		0	0	0	0	0	0
	実渡航						0
	オンライン						0
	ハイブリッド						0

## ⑪ 国際プレゼンスの向上等について

(設定指標)

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
(指標1) 留学フェア (オンラインも含む)	0	1	1	1	1	4
(指標2) 海外連携大学でのリクルーティング (オンラインも含む)	1	1	1	1	1	5
(指標3) オンライン教育科目の開発	0	1	1	1	1	4
(指標4)						0
(指標5)						0

【計画内容】

本学ではオーストラリアにおける教育・研究等の交流および連絡拠点として2020年に神戸大学パース拠点を設置し、オーストラリアの大学及び研究機関との交流を促進することを目指している。本プログラムにおいては、オンラインも含めてオーストラリアの協定校を中心に留学フェアおよびプログラム参加希望者のリクルーティングを実施する。留学フェアにおいては、本プログラムの紹介に加えて、本学の短期プログラムや博士課程前期課程及び後期課程への進学についても紹介し、豪州からの留学生の更なる受入を目指す。また、本プログラムで提供する科目については、オンデマンドで日・英（日本語・英語字幕等）でプログラム関係学生以外へも提供できるよう教育科目の開発を行う。

## ⑫ ⑪を除く、学内・学外への事業の波及効果について

(設定指標)

	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	合計
(指標1) 大学間交流協定数 (オーストラリア)	4	4	5	6	7	26
(指標2) 学生交流数 (全学・受入) (オーストラリア)	8	15	15	18	20	76
(指標3) 学生交流数 (全学・派遣) (オーストラリア)	20	100	110	115	120	465
(指標4) 研究者交流数 (全学・受入) (オーストラリア)	15	24	28	30	35	132
(指標5) 研究者交流数 (全学・派遣) (オーストラリア)	15	24	28	30	35	132

【計画内容】

本プログラムについては、工学部・工学研究科を中心としたものとなっているが、学生ワークショップや報告会については他学部からも学生の参加を募り、学部を超えた交流につなげる。また、本プログラムの実施が実現することで、理系分野の学生にとっての国際交流を行うモデルケースを提示し、同様のプログラムを他の理系学部へも展開する。さらに、本プログラムで提供する授業科目（日本語・日本文化科目等を含む）をオーストラリアのプログラム協力校以外の大学においてもプログラムに関心のある学生へも提供可能とすることで、オーストラリアからの受入学生の増加へ繋げる。

研究者交流に関しては、学部レベルでのプログラム修了後、博士前期課程での研究インターンシップ等で学生の中・長期間の留学へ繋げることで、研究室レベルでの交流を拡大し、共同研究の増加を目指す。

また、学外への事業の波及効果としては、東北大学が主幹校である文部科学省「国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の促進と世界展開」への横展開が期待され、海外大学からのJV-Campus利用学生や日本に友好的に興味を持つ学生の増加が期待される。

## ⑬ 加点事項に関する取組【2ページ以内】

## 【実績・準備状況】

○日本人学生と外国人留学生がチームを組み、アントレプレナーシップの醸成に資する、実践的なプログラムを行う計画となっているか。

海外留学生を短期留学生として受け入れた際、国内学生とチームを組み、新価値創造型PBLのグループワークを行う予定である。実施組織となる本学バリュースクールでは、これまでに文科省EDGE-NEXTの一環としてアントレプレナーシップ醸成に資するプログラムを開発し、国内学生と海外留学生がグループワークを通じて新規事業アイデアを創るワークショップを実施している。またバリュースクールには経営学研究科などアントレプレナーシップを専門とする教員や実務家教員が所属しており、実践的プログラムを提供できる体制が整っている。さらにアントレプレナー教育の名門である米国バブソン大学と協働で、国内学生と海外留学生が地域課題に対する解決アイデアを立案するワークショップの提供実績もある。これら経験と実績をベースに、異文化/異分野適応能力とアントレプレナーシップ醸成を含む実践力を育成するプログラムとする予定である。担当教員とはプログラム方向性について議論、了解済みであり、今後具体的実施法について詳細検討していく。

○カーボンニュートラルやSDGs、防災・減災といった世界的課題解決に向けた、国内外の大学及び地域・社会・企業とも連携した計画となっているか。

本プログラムは本学工学部が主部局として管理運営を行う。カーボンニュートラル、SDGsなど世界的課題の解決をテーマに、工学的視点から国際共修/協働学修体験を複数年かけて実施し、複眼的視野とリーダーシップをもつ次世代工学系グローバル人材を養成することを目的としており、本交流プログラムの主軸として事業内容を整備していく。かつ神戸地域を中心として、世界展開されている複数の民間企業、公的研究所にご協力いただき、外国人留学生、日本人学生とグローバル企業研修、インターンシップ紹介などを行う計画としている。また阪神淡路大震災の経験に基づく防災減災講義も予定している。また神戸大学バリュースクールでは、START大学・エコシステム推進型スタートアップ・エコシステム形成支援事業の一環で、カーボンニュートラルひいてはSDGsをテーマにしたPBL「未来社会のエネルギー」を京都大学と大阪大学と協働で開発・実施し、すでに複数の企業から問い合わせがきている。本交流プログラムでは、START大学・エコシステム推進型スタートアップ・エコシステム形成支援事業との連動を図り、国内大学や企業との連携を強化していく。

○本事業を通じ、国際共同研究の土台となるような国際ネットワークを構築する計画となっているか。

海外相手国への短期留学派遣、受入の際には、理工系研究室や実験施設のラボツアー実施を計画している。工学分野には建築学、市民工学、電気電子工学、機械工学、応用化学、情報知能学など多様な分野が存在し、各々専門性が異なることから、研究マッチングの意味でも複数の研究室、研究センターの見学会を計画している。本プログラムの主たる連携大学となる豪州・ロイヤルメルボルン工科大とは、両国の工学部教員間の国際共同研究がきっかけとなり、現在の大学間協定関係へ発展してきた。日本人学生の短期留学派遣の際には若手教員を帯同し、学生だけでなく若手教員間での国際共同研究のきっかけとすると共に、豪州内の別大学への横展開なども検討していきたい。

○交流する相互の学生が、真の両国間の架け橋となる人材を目指し、双方の文化及び言語について高いレベルで習得する計画となっているか。

豪州と日本との交流の主言語は英語となる。工学分野で真に両国間の架け橋となる人材の育成には、工学分野の専門用語を駆使し、論理的に相手に説明、議論する力が必要である。本プログラムでは、海外大学にて工学系講義に参加できる程度の専門英語を身につけさせるため、半年にわたり「工学英語入門」を開講し、履修を必修化する計画である。また双方の文化や立場を理解することは非常に重要である。JV-Campusにて提供予定の「日本事情教育」や前述した新価値創造型PBLの中で、相手国の立場にたった意見交換会など、グループワークや学生WSにおいて異文化理解能力の獲得にむけた仕掛けを準備する予定である。

○アウトカムに関する指標について、他大学の参考となる指標が設定されているか。

「単に語学力の向上だけでなく、協働による異文化適応力やリーダーシップをもつグローバル人材の養成」というアウトカムに向けて、既に実績のあるグローバル・チャレンジ・プログラム(GCP)をベースに海外/日本国内における複数社のグローバル企業研修/協働学修体験(総計10社以上)、学生主催ワークショップ(総計10回)を開催する予定である。定量化しにくい異分野適応力やリーダーシップなどの能力を分析するための分析ツールとしてThe Beliefs, Events, and Values Inventory-Japan(BEVI-J)を導入して定量化を試み、根拠を持って学生指導をおこなうと共に、実施プログラム改良を重ねていく。

○国内外の連携大学と協同したマイクロクレデンシャルや学習計画のデジタル化に取り組む計画となっているか。

本学工学部では独自に国際サマースクールを実施してきた。民間企業の見学会や議論グループワーク、工学部教員による英語講義など、全コースワークを修了した学生には「プログラム履修証明書」を発行してきた。本プログラムにおいても同様のプログラム修了証書の発行を予定している。また、新たに構築されるLMSにより参加学生の学修計画をデジタル化し、指導に役立てて行く予定である。

## 【計画内容】

外国人学生を短期留学生として受け入れた際、日本人学生とチームを組み、新価値創造型PBLのグループワーク（英語）を行う予定である。経済学部を中心とした文社系学生にも参加いただくことで、国際的かつ文理融合型グループワークを開催し、かつ学生主催ワークショップも企画開催することで、異文化/異分野適応能力とアントレプレナーシップ醸成を含む実践力の育成を目指す。

○カーボンニュートラルやSDGs、防災・減災といった世界的課題解決に向けた、国内外の大学及び地域・社会・企業とも連携した計画となっているか。

本プログラムの主軸として、カーボンニュートラル、SDGsなど世界的課題解決に関する工学講義、防災減災関連施設や水素エネルギー関連施設等の企業見学会などを計画している。見学後は、グループワークやディスカッションの時間をとり、各々の国の、国際的な、またはサプライチェーンにおける立ち位置を認識し、双方共に成長・発展して行くための相互理解の場としたい。

○本事業を通じ国際共同研究の土台となるような国際ネットワークを構築する計画となっているか。

海外相手国への短期留学派遣、受入の際には、理工系研究室や実験施設のラボツアー実施を計画している。工学分野には建築学、市民工学、電気電子工学、機械工学、応用化学、情報学など多様な分野が存在し、各々専門性が異なることから、研究マッチングの意味でも複数の研究室、研究センターの見学会を計画している。短期留学派遣の際には若手教員を帯同し、学生だけでなく若手教員間での国際共同研究のきっかけとすると共に、豪州内の別大学への横展開なども検討していきたい。

○交流する相互の学生が、真の両国間の架け橋となる人材を目指し、双方の文化及び言語について高いレベルで習得する計画となっているか。

本プログラムへの参加選抜に英語外部試験を適用し、一般的な英語能力を把握した後（TOEIC平均700点）、海外大学にて工学系講義に参加できる程度の専門英語を習得するため、半年間「工学英語入門」を開講し、その履修を必修化する。双方の文化や立場を理解するための基礎素養として、JV-Campusから提供予定の「日本事情教育」や前述の新価値創造型PBLの中で、相手国の立場にたった意見交換会など、グループワークや学生WSにおいて異文化理解能力の獲得にむけた仕掛けを準備する予定である。

○アウトカムに関する指標について、他大学の参考となる指標が設定されているか。

「単に語学力の向上だけでなく、協働による異文化適応力やリーダーシップをもつグローバル人材の養成」というアウトカムに向けて、海外/日本国内における複数社のグローバル企業研修、協働学修体験、学生主催ワークショップを開催する予定である。また分析ツールとしてThe Beliefs, Events, and Values Inventory-Japan(BEVI-J)を導入し、定量化しにくい異分野適応力やリーダーシップなどの能力を定量化することを試み、根拠を持って学生指導をおこなうと共に、実施プログラム改良を重ねていく。

○国内外の連携大学と協同したマイクロレデンシャルや学習計画のデジタル化に取り組む計画となっているか。

本学は、文部科学省「国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の促進と世界展開」プログラム（主幹校：東北大学）に参画しており、当該プログラムの横展開・波及効果としてもJV-Campusへの講義コンテンツの提供を行っていく予定である。具体的には、カーボンニュートラル、SDGs、防災・減災等をテーマとして、自大学および連携大学以外の大学が利用できるデジタルコンテンツとして提供予定（令和5年度末）である。また参加学生の学修計画について、新たに構築されるLMSによりデジタル化して行く予定である。本申請プログラムにて企画する全コースワークを修了した学生には「プログラム履修証明書」の発行を予定している。

## 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備 【①～③合わせて3ページ以内】

## ① 日本人学生の派遣のための環境整備

## 【実績・準備状況】

## ○日本人学生への危機管理に関する取り組み:

危機管理に関する全学的な取り組みとしては、海外渡航学生に対する危機管理体制を 2009 年より構築している。危機管理オリエンテーションの実施に加えて、派遣留学生危機管理サービスを提供し、ケガや病気への補償制度を構築している。日本人学生に対しては、これまでの 6 年間の神戸大学グローバル・チャレンジ・プログラム (GCP: 工学部海外協定校派遣コース) において、派遣予定学生のスケジュール管理、派遣中の危機管理事項などについて指導を行ってきた。また、学生派遣までの事前学習として、グローバル教育センターによる安全教育を講習してきた。帰国後も、事後学修を通して留学経験の定着を図るだけでなく、今後の工学部・工学研究科での研究活動に役立つようフォローアップを進めている。

## ○学生の履修に関する情報提供

単位認定可能な科目、履修体系や順序、単位の相互認定の手続き、アカデミックカレンダーの相違・時差については、担任教員や教務学生係職員との面談、メール連絡等により情報供与している。留学先での単位認定可能な科目については、単位互換の対象となる科目について予め情報提供し、担任教員や教務係と情報共有している。

## ○ボランティアやサークル活動等の課外活動による日本人学生と外国人学生の交流計画

本学には全学的な公認課外活動団体および同好会があり、課外活動に関する情報を発信している。工学部では、教務係と学生委員会が主催の留学生パーティを実施し、日本人学生と外国人学生の交流を実施している。

## ○国際機関・産業界などとの連携について

本学では、キャリアセンターにおいて学生に対するキャリア教育や就職相談会、国内企業でのインターンシップ紹介を行っている。工学部学生への民間企業からの就職求人は多く、海外留学を経験した学生は、特に多くの企業から興味をもってもらっている。

## 【計画内容】

## ○サポート体制の充実

本学では、国際通用力のある質の高い教育を実施すること、キャンパスのグローバル化に向けた取り組みを進めることを掲げ、単位/学位授与など教務支援、留学中の危機管理・安全教育など、サポート体制の充実に取り組んできた。特に、2022年度には本学グローバル教育センターに、新たに「海外派遣教育部門」が設置され、国内学生の留学相談、留学の事前/事後教育、留学アドバイスや留学成果の評価や定量化・データ蓄積に取り組んでいる。とりわけ2022年度より、留学による学習・成長のプロセスや成果を捉えるための分析ツールBEVI-Jを導入し、同時にそのシステムを扱える専門家を部門内に配置することにより、留学前後の変化のみならず、リーダーシップ・プログラムやメンタル・ヘルス等にいたるまで、様々な場面で、数値化し見える化していく予定であり、定量化された指標によって効果的に学生サポートを実施していく予定である。本プログラムは、これら全学組織の全面的支援が確約されている。

**② 外国人学生の受入のための環境整備****【実績・準備状況】****○外国人学生のサポート体制の構築**

本学グローバル教育センターには「留学生教育部門」が設置されており、外国人学生の留学受入、レベル分けされた日本語予備教育、修学支援、留学生向け就職セミナー(キャリアセンター共催)、などのサポートを実施している。また、修学上の諸問題については、各部局において教職員による個別指導や各講義 TA やチューターを通じた留学生生活全般のサポート体制を構築している。受入学生に対しては留学生オリエンテーションを実施し、履修指導が行われている。

**○学生の履修に関する情報提供**

単位認定可能な科目、履修体系や順序、単位の相互認定の手続き、アカデミックカレンダーの相違・時差については、担任教員や教務学生係職員との面談、メール連絡等により情報供与している。留学先での単位認定可能な科目については、単位互換の対象となる科目について予め情報提供し、担任教員や教務係と情報共有している。

**○ボランティアやサークル活動等の課外活動による日本人学生と外国人学生の交流計画**

本学には全学的な公認課外活動団体および同好会があり、課外活動に関する情報を発信している。工学部では、教務係と学生委員会が主催の留学生パーティを実施し、日本人学生と外国人学生の交流を実施している。

**○インターンシップ・就職支援・産業界との連携**

本学では、キャリアセンターにおいて外国人留学生を対象にしたキャリア教育や就職相談会、国内企業でのインターンシップ紹介を行っている。最近では、文部科学省「留学生就職促進プログラム」に採択され、「日本語能力」「日本での企業文化等キャリア教育」「中長期インターンシップ」を一体として学ぶ環境の整備に取り組み、外国人留学生が国内企業に就職し、結果として外国人留学生の国内・日系企業への就職率を向上させることに取り組んでおり、本交流プログラムとの相性も良く、強力な支援を頂く予定になっている。

**【計画内容】****○サポート体制の充実**

本学では、国際通用力のある質の高い教育を実施すること、キャンパスのグローバル化に向けた取り組みを進めることを掲げ、単位/学位授与など教務支援、国内企業での就職支援、キャリア教育など、サポート体制の充実に取り組んでいる。特に、本学グローバル教育センターには「留学生教育部門」が設置されており、海外学生の留学受入、日本語予備教育、修学支援、留学生向け就職セミナー(キャリアセンター共催)、などを実施していく計画である。また学内の「外国人留学生後援会」と連携しながら留学生支援や危機管理を行う予定である。

**③ 関係大学間の連絡体制の整備****【実績・準備状況】****○関係大学間の連絡・情報共有体制の整備**

大学間での学術交流協定を更新手続き中であり、教員間の連絡体制は、共同研究をベースに既に構築されている。双方大学のスタッフは年1回の実務者会議の他、年に数回会合を行っており、必要な情報共有体制は整備されている。

**○終了後のサポート体制と同窓会団体の整備**

本プログラム終了後も、両国間の学生同士の個人的ネットワークは維持されている。これら学生間ネットワークを組織的に整備し、同窓会組織の整備も検討する。SNS を活用したネットワーク形成により横連携(同級生)だけでなく、上下連携(先輩後輩)も生まれ、継続的なサポート体制が醸成されることを期待したい。

**○リスク管理への配慮**

リスク管理については、緊急時に備えて、参加学生に民間企業による留学生危機管理サービス(OSSMA Plus)加入を義務付け、迅速な情報収集を行える体制を確立している。日常的なリスクは、指導教員・日本人チューターによって把握・共有され、学生のリスク管理に必要なサポート体制を整備している。

**【計画内容】****○関係大学間の連絡・情報共有体制の整備**

神戸大学、豪州・RMIT、米国・ジョージア工科大、タイ・マヒドン大学の部局間での協力体制の構築に加えて、本プログラム担当者間の協力体制を構築する。定期的にプログラム進行度についての情報共有を計る。

**○終了後のサポート体制と同窓会団体の整備**

本プログラム実施期間中に形成された学生間ネットワーク、若手教員間ネットワークを大切にして、今後の修了生の増加に対応した体制を確立する。

**○リスク管理への配慮**

OSSMA Plus加入を前提とした全学的な危機管理体制を基盤として、問題の発生時には部局間、教員間の連絡体制を活用した情報収集を行う。

## 事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及【①～②合わせて2ページ以内】

## ① 事業の実施に伴う大学の国際化

## 【実績・準備状況】

## ○他大学学生も参加できる組織的・継続的な教育連携体制の構築

本学では「グローバル・キャンパス」の実現に向けて、オンラインを活用した共同教育プログラムの拡大を推進している。本プログラムは神戸大学の方向性に合致し、本プログラムを通じて本学のグローバル・キャンパス化の実現に貢献するものである。

最近、神戸大学では、東北大学を幹事校とする文部科学省「国際共修ネットワークによる大学教育の内なる国際化の加速と世界展開」に参画し、他大学学生も参加できる組織的・継続的な教育連携体制の構築に取り組んでいる。当該、国際共修プログラムでの教育実践やその評価を共有し、その高度化と国際的通用性の向上を図りながら、国内外に横展開することを目標としています。

この中で、神戸大学は、

学際領域(1) SDGs

学際領域(2) 震災・復興

学際領域(4) 産学連携・リーダーシップ

学際領域(5) 日本文化・社会

を担当し、これらオンライン講義開発を行っています。この様に、神戸大学では他大学学生も参加できる教育連携体制を構築した実績があり、組織的にも十分対応できる環境にある。

なお本プロジェクトに関してはホームページ(<https://intercul.ihe.tohoku.ac.jp/icl/project/>)にて広く情報公開されています。

## ○高い語学力を有した事務職員の配置

工学部・工学研究科には、日本での先端工学技術を学ぼうと外国人学生が在籍しており、教務学生係を中心に、高い語学力をもつ職員が配備されている。全学的な取り組みとして、本学大学教育推進機構が主催となり、コロナ禍による大学間交流の有り方や留学再会に関するFD 研修会や遠隔授業のスキルを高めるためのFD 研修会を実施している。さらに事務職員のグローバル化対応能力の向上を図るため、実務能力養成のための語学等研修や国内外における国際職員研修を行い、学生の留学支援を充実させることで、教育環境のグローバル化に向けた制度を構築している。

## 【計画内容】

## ○組織的・継続的な教育連携を実施する体制の構築

本プログラムは、神戸大学内の全学教育センター群(グローバル教育センター、国際コミュニケーションセンター、異分野共創型教育開発センター、キャリアセンター、バリュースクール)による全学支援体制を整備し、学内外に波及しうる国際共修/協働学修体験型の教育プログラムの構築を計画している。外国人学生受入や日本人学生の海外派遣教育、留学事前教育はグローバル教育センターが担当し、英語教育は国際コミュニケーションセンター、専門的な工学英語教育は工学部が中心となって教育する。またバリュースクールは国際的かつ新価値創造型の国際共修ワークショップの開催、キャリアセンターは外国人留学生向けインターンシップ開拓やキャリア教育を行う計画である。この様に、各センターの特徴と強みを活かした全学支援計画によって、長期にわたって継続しやすい教育プログラムとして構築されよう。

**② 国内外への情報提供の方法・体制、成果の普及****【実績・準備状況】****○交流プログラム内容の積極的な発信**

神戸大学グローバル・チャレンジ・プログラム(GCP)の活動内容や報告会の様子は、HP にて公開されている(<http://www.iphe.kobe-u.ac.jp/kobe-gcp/>)。GCP の設置目的やコース紹介、活動内容や履修内容、発表会などについて公開している。本プログラムについては、専用 HP を新たに開設し、学内関係者のみならず、他大学や産業界など広く社会に向けて情報発信し、その普及に取り組む。

**○外国語による本プログラムの情報発信**

本プログラムの教育内容、質を保証する観点、学生への本プログラムの内容に関する情報提供の観点から、本プログラムの実施状況や交流プログラムについて、英語と日本語による情報を定期的に発信している。

**○大学のグローバル化に向けた国内外への教育情報の発信**

中央教育審議会大学分科会国際的な大学評価活動に関するワーキンググループ「国際的な大学評価活動の展開状況や我が国の大学に関する情報の海外発信の観点から公表が望まれる項目の例」(平成22年5月)が掲げる、国際的な活動に特に重点を置く大学において公表が望まれる項目について、本学および国際協力研究科のホームページでは、学生一人当たり教員比率、インターンシップの機会の提供状況、卒業後の進路状況(進学率、就職率、資格取得の状況等)、修得すべき知識・技能の内容を明確化し、それを体系的に修得できる教育課程、授業科目の計画的な履修方針に基づいた授業科目名とシラバスを公開しており、大学のグローバル化に向けた戦略的な国内外への教育情報の発信を行っている。

**【計画内容】**

新たに本プログラムに関する専用 HP を開設し、本プログラムの活動内容や取り組み、履修内容、発表会などについて、学内関係者のみならず、他大学や産業界など広く社会に向けて情報発信し、本活動の普及に取り組む。また本プログラムに関するパンフレットは英語と日本語で作成することとし、日本人および外国人の学生に対して本プログラムに関する適切な情報を発信していく予定である。

また継続的に発信内容の更新と充実化を図ると共に、グローバル企業研修、学生主催ワークショップ、シンポジウム等の開催案内や活動内容を学内外に広く成果を発信し、その普及を目指す。

## 交流プログラムを実施する海外相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

相手大学名  
(国名)

ロイヤルメルボルン工科大学(オーストラリア)

## ① 交流実績(交流の背景)

本学工学部教員の共同研究を足がかりとして、2017年2月にロイヤルメルボルン工科大学(RMIT)との間に学術交流協定を締結した。2017年10月には両機関の交流の活性化を図るためにロイヤルメルボルン工科大学(RMIT)にて学術交流ワークショップを開催した。また、学生を本学の学生派遣プログラムである神戸グローバルチャレンジプログラム(GCP)の派遣先大学としての協力を依頼し、2019年9月には参加学生12名が本プログラムにおいてRMITを訪問した。訪問時には、現地授業への参加、研究室・研究期間、現地企業の訪問などを行った。また、後述するKobe University Engineering Summer Schoolへ参加したRMITの学生が現地では神戸大学の学生を案内するなど学生間の交流が促進された。

受入れについては、Kobe University Engineering Summer School2018及び2019においてRMITから各年5名の学生を受入れている。サマースクールには本学のGCP学生も参加するため、授業の受講、企業訪問、休日での交流を通して活発な学生交流が行われた。



Kobe University Engineering Summer School 2019



Kobe University Engineering Summer School 2019

## ② 交流に向けた準備状況

本学工学部応用化学科の教員と豪州・RMITの教員との間で、長年、国際共同研究が行われており、両研究者を介して、両大学間の関係は非常に友好的である。現時点においても、担当者間ではメールおよび電話によって即応的に情報を共有する状況にあり、実施体制についてはこれまでの交流関係を基盤としてすでに構築済みである。

## 交流プログラムを実施する海外相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

相手大学名  
(国名)

ジョージア工科大学(アメリカ)

## ① 交流実績(交流の背景)

ジョージア工科大学は、本学と2019年から連携して「Japan Summer Program in Sustainable Development」を実施してきた。持続可能な発展と大都市や地方の直面する課題を探求することを目的として、問題解決型学習(Problem Based Learning)形式でジョージア工科大学の学生、本学の学生が共同で授業に参加するプログラムであり、Brian Woodall 教授ほか、教員数名、ジョージア工科大学の学生数十名が来日し、日米学生共同でグループワーク、発表会を行ってきた。例えば、「Introduction to Global Development」、「Smart & Sustainable Mega-region」、「Energy, Environment, and Society」、「Global Development Capstone」など講義が開講され、日本人学生も50名ほど受講している。本連携プログラムは、コロナ感染症拡大の影響により、この2年間、実渡航による対面プロジェクトが実施できていないが、オンラインを通じた情報提供、研究発表会などが継続されている。本連携プロジェクトをきっかけに、Brian Woodall 教授と神戸大学工学部の教員との国際共同研究も開始されるなど、学生交流のみならず、国際共同研究への拡大も期待できる。今後、コロナ感染症の影響が減少し、実渡航が可能になった場合には、当該連携プログラムは再開される予定である。



写真: 米国・ジョージア工科大との連携プロジェクトの様子

## ② 交流に向けた準備状況

本学工学部市民工学科の教員と米国・ジョージア工科大学・Brian Woodall 教授との間で、国際共同研究が行われており、両研究者を介して、両大学間の関係は非常に友好的である。また Brian Woodall 教授は、本学の国際外部評価員も歴任しており、神戸大学の国際的な価値、存在感を高めることに寄与してくれると考えられる。現時点においても、担当者間ではメールおよび電話によって即応的に情報を共有する状況にあり、実施体制についてはこれまでの交流関係を基盤としてすでに構築済みである。

## 交流プログラムを実施する海外相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

相手大学名  
(国名)

マヒドン大学(タイ)

## ① 交流実績(交流の背景)

本学とマヒドン大学との交流は、両大学工学部教員による国際共同研究をきっかけとしてスタートした。2016年には、化学工学分野におけるプロセス強化に関する国際シンポジウムが神戸大学にて開催され、その後、本学工学部長他がマヒドン大学を訪問し、国際交流協定・細則を締結することで学生交流まで拡大した。2019年には、マヒドン大学にて、マヒドン大・神戸大ジョイントワークショップが開催されている。同年には、JST-さくらサイエンスプログラムにおいて、「バイオマス技術による持続可能社会構築に向けた技術習得とSDGsを目指したグループ討論」というテーマにて、マヒドン大学工学部 B3,B4 学生5名を本学工学部にて受け入れ、研究室見学、企業見学、グループワークなどを実施してきた。2020年には、本学から申請した文部科学省「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択され、マヒドン大学工学部から修士課程学生1名、2022年にも修士課程学生1名を受け入れるに至っている。このように学生交流は良好に継続していると共に、現在も国際共同研究も継続していることから、マヒドン大学工学部と神戸大学工学部との交流関係は良好であり、担当教員間では電子メールや電話にて、直ちに情報交換できる状況にある。



写真:企業見学(左、中)、及びマヒドン大-神戸大ワークショップ(右)の様子

## ③ 交流に向けた準備状況

本学工学部応用化学科の教員とタイ・マヒドン大学の教員との間で、長年、国際共同研究が行われており、両研究者を介して、両大学間の関係は非常に友好的である。現時点においても、担当者間ではメールおよび電話によって即応的に情報を共有する状況にあり、実施体制についてはこれまでの交流関係を基盤としてすでに構築済みである。

## 事業計画の実現性、事業の発展性【①は1ページ以内、②、③、④は合わせて3ページ以内】

## ① 年度別実施計画

## 【2022年度(申請時の準備状況も記載)】

本学理事(教育担当)をリーダーとして、グローバル教育センター、国際コミュニケーションセンター、バリュースクール、キャリアセンター、工学研究科副研究科長(教育担当)の教員からなる申請検討会を開催した。プログラム申請における各部局、センターの役割などを議論し、全学支援に基づいて本プログラム申請を行うことを決定した。10月以降、本プログラムへの選抜学生に対して「工学英語入門」を開講し、工学分野を専門的に英語で学ぶ機会を提供して単位認定する。また豪州・ロイヤルメルボルン工科大学、米国・ジョージア工科大、タイ・マヒドン大学の担当教員と、各国間での学生募集、選考方法、プログラム内容、教務取り扱い(質の保証)について意見交換し、問題点を洗い出す。本事業の本格始動に向けて特命教員と事務職員の人事選考を進め、次年度からの本格業務にむけての体制作りを行う。

## 【2023年度】

本プログラムを本格的に開始し、日本人学生の海外留学“派遣”(約20名)、サマースクールによる外国人学生の“受入”(約20名)のプログラム制度化を目指す。日本人学生が、相手大学で参加可能な工学英語講義科目、ラボツアー、企業・研究施設見学などについて、相手国教員と事前協議し、準備と行程管理を行う。留学安全教育を受けた後、チャレンジターム(夏季休暇)中に海外派遣する。またサマースクールによる外国人学生の受入では、カーボンニュートラル/SDGsを題材にした工学講義、防災減災施設の見学などを行うと共に、地域企業の協力を得てグローバル企業研修を開催する。選抜日本人学生も参加し国際協働学習体験の場とする。キャリアセンターでは留学生向けキャリア教育、バリュースクールではCN/SDGsを題材としたPBL/グループワークを行う。これら経験を通じて、学生が主体となってワークショップを開催する。また、JV-Campusを通じたコンテンツ提供にむけた準備を進める。

## 【2024年度】

前年度の実績に基づき、日本人学生の海外派遣/外国人学生の受入プログラム内容の充実を図る。引き続き、相手国大学へ日本人学生を短期留学派遣(20人程度)し、外国人留学生を受け入れる(20人程度)。特に、外国人学生の企業研修受入先が少ないことから継続して企業開拓し、増やしていく。また2024年度末までにJV-Campusへのコンテンツ提供を達成するため、関連教員からなる検討会を開催しコンテンツ作成を加速し、確実にコンテンツ提供する。本格実施したプログラム成果を元に、中間評価に向けたプログラム課題の洗い出しを行う。

## 【2025年度】

中間評価の結果に基づいて、プログラム内容を練り直し、改善項目を反映した上でプログラムを実施する。引き続き、神戸大学と豪州・ロイヤルメルボルン工科大学、米国・ジョージア工科大、タイ・マヒドン大学の他、海外大学との間でバランスの取れた学生の受入/派遣(各20名)を行う。豪州地域においては、ロイヤルメルボルン工科大学のみならず、近隣にある他大学(例えば西オーストラリア大など)への横展開も検討する。

## 【2026年度】

前年度の実績に基づきつつ、上記のプログラム内容を継続して行う。豪州・ロイヤルメルボルン工科大学、米国・ジョージア工科大、タイ・マヒドン大学との間で学生の受入/派遣を各大学間で20名程度の規模で行う。本プログラム1期生が大学院進学(本工学部における修士進学率:約80%)して修士課程1年生になることから、本プログラムでの経験が、中長期的な本格的な研究留学に繋がりそうかアンケート調査を行い、継続的な国際共修/協働学習体験の効果について検証を行う。

## ② 交流プログラムの質の向上のための評価体制

## 【実績・準備状況】

○評価体制の整備／構想をサポートする全学的体制の充実

本プログラムの前身である、工学部 GCP ではプログラム実施内容や成果報告は、各学科の教務委員から構成される工学部教務委員会にて報告・審議され、ルーブリックや学生自身による振り返り診断による達成度の評価や次回に向けての改善点などを議論してきた実績がある。本プログラムではこれら基本的な評価体制を引き継ぎつつ、評価委員および理事・副学長をはじめとする学内関係部局から参加者を得る形で、新たに全学プログラム実行委員会を組織し、プログラム実施状況と教育内容に関する情報共有を行う予定である。

## 【計画内容】

本プログラムにおいては、交流プログラムの実施内容やその成果をまず工学部教務委員会にて報告、審議する。ルーブリックや学生自身による振り返り診断による達成度の評価や次回に向けての改善点などを議事録として整理し、それらの結果を、全学プログラム実行委員会にて議論する予定である。定量評価が難しい国際共修や留学による人間的成長やリーダーシップの能力評価として、新たに分析ツール BEVI-J を導入して定量化を行い、プログラム内容の改善、質の向上に向けた取り組みを進める。全学プログラム委員会は、副学長・理事を筆頭とする全学の教育支援センター群の協力を得て行なわれている。さらに、これら委員会には事務職員も参加し、事務方レベルでの相互交流の機会も設けていく。当該委員会での討議内容は、相手国パートナー教員にも送付することで認識の共有を図る予定である

## ② 補助期間終了後の事業展開

2027 年 3 月の本プログラム終了後も、豪州・ロイヤルメルボルン工科大学、米国・ジョージア工科大、タイ・マヒドン大学との学術交流協定を、これまでと同様に継続していくものとする。プログラム期間中に積み上げ、改良してきた海外交流プログラムの実施内容を継続さらには発展させて、質の保証の伴った教育システムとして昇華させ、神戸大学の国際共修/協働学習におけるプロトタイプの1つとして学内外へ波及させる。奨学金等については、JASSO 等各国既存の制度を活用するとともに、宿舎等の便宜の提供についても各大学がそれぞれの事情に基づいて最大限の配慮を行うものとする。

本プログラムによって構築された、各大学部局間の密接な交流実績と信頼関係を基盤として、本プログラム終了後は大学間交流をよりいっそう全学的な交流関係へと拡大・深化させるものとする。

## ④ 補助期間終了後の事業展開に向けた資金計画

本学では、学内体制を整備し、国際性に富みながら地域の特性に応じたアプローチの支援、部局横断的な先端研究、融合研究を可能にする環境づくりを進めている。支援期間終了後は、高度かつ実践的な人材を引き続き養成するため、「神戸大学教育研究活性化支援経費」を充当する他、同窓会組織による支援金あるいは授業料免除などさまざまな支援を検討する。また、高度な教育研究の遂行に必要とされる国際連携業務を高いレベルで実現し、大学院生の研究成果の国際会議などでの発表や調査研究、あるいは長期インターンシップなどについては「神戸大学基金」等による旅費などの支援を行っていく。また「神戸大学国際交流事業促進基金」または運営費交付金を利用し、安定したコースの供給を行うなど、本プログラムの自主的・恒常的な展開を図っていく。

## 【旅費】

事業継続等に係る旅費については、神戸大学教育研究活性化支援経費等で最大限の努力を行う。

## 【人件費】

専任コーディネーター等の人件費については、緩やかに既定の人件費の中に組み込んでいく。

## 【事業推進費】

神戸大学教育研究活性化支援経費等を活用する。

## 【計画に関する大学負担額】

本学は、大学負担となる経費については、学内予算または神戸大学教育研究活性化支援経費等の資金を活用し、事業を実施する。

## 補助期間における各経費の明細【年度ごとに1ページ】

(単位：千円)

<2022年度>	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	2,400		2,400	
	①設備備品費	1,600		1,600	
	・パソコン(1年目：3台X300000円)	900		900	
	・高輝度プロジェクター	400		400	
	・ビデオカメラ	300		300	
	②消耗品費	800		800	
	・消耗品費(文具、用紙類、トナー、用具、ソフトライセンス等)	800		800	
	[人件費・謝金]	5,030		5,030	
	①人件費	4,900		4,900	
	・プログラムコーディネーター(特命教員・1年目10)	3,000		3,000	
	・事務補佐員(1年目10-3月)	1,500		1,500	
	・非常勤講師(工学英語入門ほか)	400		400	
	②謝金	130		130	
	・外部評価指導助言謝金(4名×1.5時間×5000円)	30		30	
	・補助業務 (資料収集、セミナー開催補助、留学生受入業務補助)	100		100	
	[旅費]	3,000		3,000	
	・国内旅費	300		300	
	・国内招へい旅費(外部評価委員会出席)(4名×45000円)	200		200	
	・外国旅費(海外協定校派遣、運営に関する打ち合わせ)	2,000		2,000	
	・外国旅費(外国人講師招聘費)	500		500	
	[その他]	9,550		9,550	
	①外注費	5,000		5,000	
	・英語講義ビデオ作成	3,000		3,000	
	・教務関係資料英語化	2,000		2,000	
	②印刷製本費	300		300	
	・プロジェクト広報資料	300		300	
	③会議費	200		200	
	・会場借料等	200		200	
	④通信運搬費	50		50	
	・WiFiレンタル	50		50	
	⑤光熱水料				
	⑥その他(諸経費)	4,000		4,000	
	・派遣学生 航空券宿泊費	4,000		4,000	
2022年度	合計	19,980		19,980	

(大学名： 神戸大学

) (主な交流先： オーストラリア

)

(前ページの続き)

(単位：千円)

<2023年度> 経費区分		補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
[物品費]		600		600	
①設備備品費					
②消耗品費		600		600	
・消耗品費(文具、用紙類、トナー、用具、ソフトライセンス等)		600		600	
[人件費・謝金]		7,530	2,000	9,530	
①人件費		7,400	2,000	9,400	
・プログラムコーディネーター(特命教員)		4,500	1,500	6,000	
・事務補佐員		2,500	500	3,000	
・非常勤講師(工学英語入門ほか)		400		400	
②謝金		130		130	
・外部評価指導助言謝金(4名×1.5時間×5000円)		30		30	
・補助業務 (資料収集、セミナー開催補助、留学生受入業務補助)		100		100	
[旅費]		3,000		3,000	
・国内旅費		300		300	
・国内招へい旅費(外部評価委員会出席)(4名×45000円)		200		200	
・外国旅費(海外協定校派遣、運営に関する打ち合わせ)		2,000		2,000	
・外国旅費(外国人講師招聘費)		500		500	
[その他]		6,750		6,750	
①外注費		2,000		2,000	
・英語講義ビデオ作成		1,500		1,500	
・教務関係資料英語化		500		500	
②印刷製本費		300		300	
・プロジェクト広報資料		300		300	
③会議費		200		200	
・会場借料等		200		200	
④通信運搬費		50		50	
・WiFiレンタル		50		50	
⑤光熱水料					
⑥その他(諸経費)		4,200		4,200	
・学内レンタルスペース入居費		200		200	
・派遣学生 航空券宿泊費		4,000		4,000	
2023年度	合計	17,880	2,000	19,880	

(大学名：神戸大学

) (主な交流先：オーストラリア

)

(前ページの続き)

(単位：千円)

＜2024年度＞	経 費 区 分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	600		600	
	①設備備品費				
	②消耗品費	600		600	
	・消耗品費(文具、用紙類、トナー、用具、ソフトライセンス等)	600		600	
	[人件費・謝金]	6,030	3,500	9,530	
	①人件費	5,900	3,500	9,400	
	・プログラムコーディネーター(特命教員)	4,000	2,000	6,000	
	・事務補佐員	1,500	1,500	3,000	
	・非常勤講師(工学英語入門ほか)	400		400	
	②謝金	130		130	
	・外部評価指導助言謝金(4名×1.5時間×5000円)	30		30	
	・補助業務 (資料収集、セミナー開催補助、留学生受入業務補助)	100		100	
	[旅費]	3,000		3,000	
	・国内旅費	300		300	
	・国内招へい旅費(外部評価委員会出席)(4名×45000円)	200		200	
	・外国旅費(海外協定校派遣、運営に関する打ち合わせ)	2,000		2,000	
	・外国旅費(外国人講師招聘費)	500		500	
	[その他]	6,550	300	6,850	
	①外注費	1,800	300	2,100	
	・英語講義ビデオ作成	1,000	300	3,000	
	・教務関係資料英語化	800		800	
	②印刷製本費	300		300	
	・プロジェクト広報資料	300		300	
	③会議費	200		200	
	・会場借料等	200		200	
	④通信運搬費	50		50	
	・WiFiレンタル	50		50	
	⑤光熱水料				
	⑥その他(諸経費)	4,200		4,200	
	・学内レンタルスペース入居費	200		200	
	・派遣学生 航空券宿泊費	4,000		4,000	
2024年度	合計	16,180	3,800	19,980	

(大学名：神戸大学

) (主な交流先：オーストラリア

)

(前ページの続き)

(単位：千円)

＜2025年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	600		600	
	①設備備品費				
	②消耗品費	600		600	
	・消耗品費(文具、用紙類、トナー、用具、ソフトライセンス等)	600		600	
	[人件費・謝金]	4,030	5,500	9,530	
	①人件費	3,900	5,500	9,400	
	・プログラムコーディネーター(特命教員)	2,500	3,500	6,000	
	・事務補佐員	1,000	2,000	3,000	
	・非常勤講師(工学英語入門ほか)	400		400	
	②謝金	130		130	
	・外部評価指導助言謝金(4名×1.5時間×5000円)	30		30	
	・補助業務 (資料収集、セミナー開催補助、留学生受入業務補助)	100		100	
	[旅費]	3,000		3,000	
	・国内旅費	300		300	
	・国内招へい旅費(外部評価委員会出席)(4名×45000円)	200		200	
	・外国旅費(海外協定校派遣、運営に関する打ち合わせ)	2,000		2,000	
	・外国旅費(外国人講師招聘費)	500		500	
	[その他]	6,750		6,750	
	①外注費	2,000		2,000	
	・英語講義ビデオ作成	1,500		3,000	
	・教務関係資料英語化	500		500	
	②印刷製本費	300		300	
	・プロジェクト広報資料	300		300	
	③会議費	200		200	
	・会場借料等	200		200	
	④通信運搬費	50		50	
	・WiFiレンタル	50		50	
	⑤光熱水料				
	⑥その他(諸経費)	4,200		4,200	
	・学内レンタルスペース入居費	200		200	
	・派遣学生 航空券宿泊費	4,000		4,000	
2025年度	合計	14,380	5,500	19,880	

(大学名：神戸大学)

(主な交流先：オーストラリア)

(前ページの続き)

(単位：千円)

<2026年度> 経費区分		補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
[物品費]		600		600	
①設備備品費					
②消耗品費		600		600	
・消耗品費(文具、用紙類、トナー、用具、ソフトライセンス等)		600		600	
[人件費・謝金]		3,030	6,500	9,530	
①人件費		2,900	6,500	9,400	
・プログラムコーディネーター(特命教員)		1,500	4,500	6,000	
・事務補佐員		1,000	2,000	3,000	
・非常勤講師(工学英語入門ほか)		400		400	
②謝金		130		130	
・外部評価指導助言謝金(4名×1.5時間×5000円)		30		30	
・補助業務 (資料収集、セミナー開催補助、留学生受入業務補助)		100		100	
[旅費]		3,000		3,000	
・国内旅費		300		300	
・国内招へい旅費(外部評価委員会出席)(4名×45000円)		200		200	
・外国旅費(海外協定校派遣、運営に関する打ち合わせ)		2,000		2,000	
・外国旅費(外国人講師招聘費)		500		500	
[その他]		6,350	400	6,750	
①外注費		1,600	400	2,000	
・英語講義ビデオ作成		1,100	400	1,500	
・教務関係資料英語化		500		500	
②印刷製本費		300		300	
・プロジェクト広報資料		300		300	
③会議費		200		200	
・会場借料等		200		200	
④通信運搬費		50		50	
・WiFiレンタル		50		50	
⑤光熱水料					
⑥その他(諸経費)		4,200		4,200	
・学内レンタルスペース入居費		200		200	
・派遣学生 航空券宿泊費		4,000		4,000	
2026年度	合計	12,980	6,900	19,880	

(大学名：神戸大学

) (主な交流先：オーストラリア

)

海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
①交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大 学 名 称	(日) ロイヤルメルボルン工科大学		国名	オーストラリア		
	(英) Royal Melbourne Institute of Technology					
設 置 形 態	公立	設 置 年	1992			
設 置 者 (学 長 等)	Peggy O'Neal AO					
学 部 等 の 構 成	College of Business and Law College of Design and Social Context College of Vocational Education STEM College School of Accounting, Information Systems and Supply Chain School of Architecture and Urban Design School of Art School of Business and Law School of Computing Technologies School of Design School of Economics, Finance and Marketing School of Education School of Engineering School of Fashion and textiles School of Health and Biomedical Sciences School of Global, Urban and Social Studies School of Management School of Media and Communication School of Property, Construction and Project Management School of Science					
学 生 数	総数	96,131人	学部生数	51,204人	大学院生数	19,751人
受け入れている留学生数	問い合わせ中	日本からの留学生数	問い合わせ中			
海外への派遣学生数	問い合わせ中	日本への派遣学生数	問い合わせ中			
Webサイト (URL)	<a href="https://www.rmit.edu.au/">https://www.rmit.edu.au/</a>					
②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。 TEQSA (オーストラリア高等教育質・基準機構) により高等教育機関として全国登録簿 (National Register) に登録されている。 <a href="https://www.teqsa.gov.au/national-register/search?search_api_views_fulltext=RMIT&amp;field_provider_category=All&amp;field_self_accrediting_auth_arity=All&amp;type=All&amp;field_provider_status=All&amp;field_course_status=All&amp;field_course_other_language=All">https://www.teqsa.gov.au/national-register/search?search_api_views_fulltext=RMIT&amp;field_provider_category=All&amp;field_self_accrediting_auth_arity=All&amp;type=All&amp;field_provider_status=All&amp;field_course_status=All&amp;field_course_other_language=All</a>						

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

## 海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】

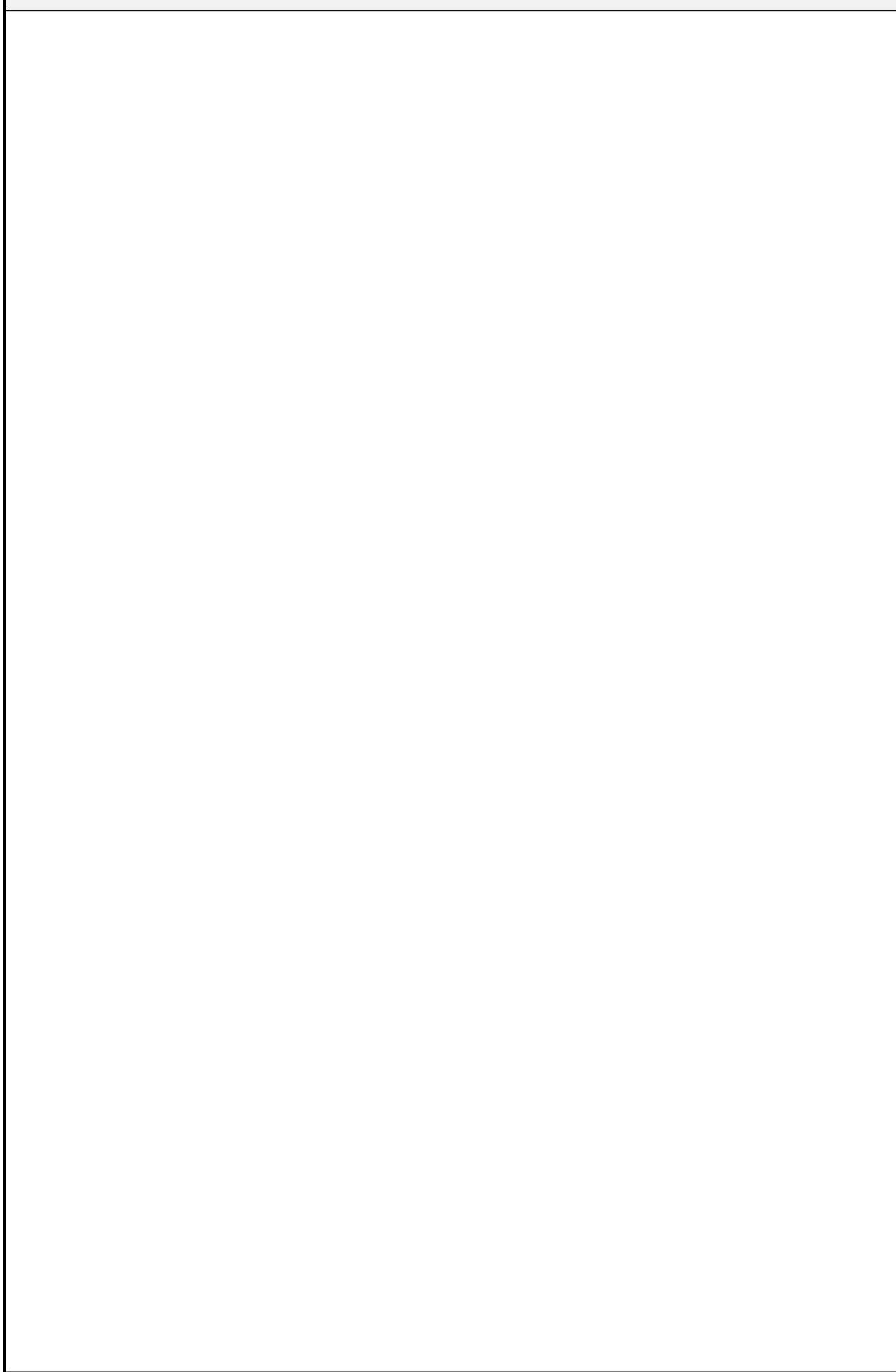
## ①交流プログラムを実施する相手大学の概要

大 学 名 称	(日) ジョージア工科大学		国名	アメリカ合衆国		
	(英) Georgia Institute of Technology					
設 置 形 態	州立	設 置 年	1885			
設 置 者 ( 学 長 等 )	Ángel Cabrera					
学 部 等 の 構 成	Scheller College of Business College of Computing College of Design College of Engineering Ivan Allen College of Liberal Arts College of Sciences					
学 生 数	総数	39,772人	学部生数	16,562人	大学院生数	23,210人
受け入れている留学生数	11,676	日本からの留学生数	63人			
海外への派遣学生数	2442	日本への派遣学生数	N/A			
Webサイト (URL)	https://www.gatech.edu/					

②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。

Council for Higher Education Accreditation (CHEA) により大学の認定 (accreditation) を確認。  
<https://www.chea.org/georgia-institute-technology>

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。



海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
①交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大 学 名 称	(日)マヒドン大学		国 名	タイ王国		
	(英) Mahidol University					
設 置 形 態	国立	設 置 年	1943			
設 置 者 ( 学 長 等 )	Banchong Mahaisavariya					
学 部 等 の 構 成	Faculty of Dentistry Faculty of Engineering Faculty of Environment and Resources Studies Faculty of Graduate Studies Faculty of Information and Communication Technology Faculty of Liberal Arts Faculty of Medical Technology Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital Faculty of Medicine Siriraj Hospital Faculty of Nursing Faculty of Pharmacy Faculty of Physical Therapy Faculty of Public Health Faculty of Science Faculty of Social Sciences and Humanities Faculty of Tropical Medicine Faculty of Veterinary Sciences College of Management College of Music College of Sports Science and Technology College of Religious Studies Mahidol University International College (MUIC) Ratchasuda College					
学 生 数	総数	30,466人	学部生数	20,644人	大学院生数	8,754人
受け入れている留学生数	問い合わせ中		日本からの留学生数	問い合わせ中		
海外への派遣学生数	問い合わせ中		日本への派遣学生数	問い合わせ中		
Webサイト(URL)	<a href="https://mahidol.ac.th/">https://mahidol.ac.th/</a>					
②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
IAU(International Association of Universities)のWHED(World Higher Education Database)に掲載を確認。 <a href="https://whed.net/home.php">https://whed.net/home.php</a>						

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

参考データ【国内の大学等1校につき、①～③は枠内に記入、④～⑥はそれぞれ指定ページ以内】

大学等名 神戸大学

## ①大学等全体における出身国別の留学生の受入総数（2019年5月1日現在）及び各出身国（地域）別の2019年度の留学生受入人数

順位	出身国（地域）	受入総数	2019年度 受入人数
1	中国	784	945
2	韓国	104	122
3	インドネシア	61	80
4	台湾	43	57
5	フランス	31	52
6	ベトナム	27	36
7	バングラデシュ	23	26
8	マレーシア	23	25
9	タイ	17	18
10	ドイツ（イタリアも同数）	17	48
その他 (上記10カ国以外)	(主な国名) イタリア	269	408
留学生の受入人数の合計		1399	1817
全学生数		16226	
留学生比率		8.6%	

## ②2019年度中に留学した日本人学生数及び派遣先大学合計校数

順位	派遣先大学の所在国 (地域)	派遣先大学名	2019年度 派遣人数
1	インドネシア	ハサヌディン大学	36
2	フィリピン	フィリピン大学ロスバノス校	35
3	台湾	国立台湾大学	29
4	米国	ニューヨーク市立大学クイーンズ・カレッジ	28
5	英国	クランフィールド大学	23
6	インドネシア	ガジャマダ大学	19
7	オーストラリア	ウェスタン・シドニー大学	18
8	オーストラリア	クイーンズランド大学	17
9	フランス	パリ大学(パリ・ディドロ大学)	17
10	オーストラリア	西オーストラリア大学	16
その他 (上記10カ国以外)	(主な国名) 米国 計 43 カ国	(主な大学名) ワシントン大学 計 242 校	552
派遣先大学合計校数		252	
派遣人数の合計		790	

(大学名: 神戸大学) (主な交流先: オーストラリア)

大学等名	神戸大学						
③大学等全体における外国人教員数（兼務者を含む）（2022年5月1日現在）							
全教員数	外国人教員数						外国人教員の比率
	教授	准教授	講師	助教	助手	合計	
2566	20	16	11	24	98	169	7%
うち専任教員 （本務者）数	20	16	10	24	6	76	

大学等名	神戸大学
<b>④取組の実績</b> 【4ページ以内】	
<p><b>○英語による授業の実施</b></p> <p>英語教育について、学生が将来の目標に応じて英語学修をよりよく行えるよう、平成29年度から全学共通教育及び専門教育における英語教育を階層化・体系化して、「神戸大学の英語教育（アカデミック・イングリッシュを学ぶ）」として明示するとともに、グローバル人材育成のための英語能力向上方策の一つとして、新入生を対象とした英語プレースメント試験(英語外部試験)を義務化した。この試験の結果に基づき、単位授与制度を導入するとともに、英語学修に積極的関心を持つ成績上位の学生を対象に、より高度な英語運用能力の向上を目指し、必修科目の中に英語特別クラスを設け、原則ネイティブスピーカーの教員が担当する1クラス25名程度の少人数クラスでより高度なレベルの指導を行った。</p> <p>平成31(令和元)年度からは、学士課程における4年一貫の英語教育の体系化に向け、全学共通授業科目の英語必修科目を4単位化し、各学部が開講する「専門分野を英語で学ぶ科目」を整備した。</p> <p>英語そのものを習得する授業のほか、外国語による授業も、平成28年度7.5%、平成29年度8.5%、平成30年度9.3%、平成31(令和元)年度9.3%、令和2年度9.7%と年々充実させ、各学部・研究科において国際性及び実践性を強化する教育を展開した。</p> <p>また、英語によるプログラムの例を以下のとおり挙げる。</p> <p><b>【理学研究科】</b> 平成30年度に英語の授業・研究指導のみで修了できる「理学英語コース」を設置した。</p> <p><b>【保健学研究科】</b> 平成24年度に英語による授業科目の履修のみで学位取得が可能な「ICHS (International Course of Health Sciences)」を開始した。</p> <p><b>【システム情報学研究科】</b> 授業科目に英語カテゴリーを導入し、全ての科目をカテゴリーA（すべて英語による授業）ないしカテゴリーB（板書や資料は英語で提供）で実施することを原則としている。</p> <p><b>【法学研究科】</b> 「GMAP in Lawプログラム」では、全ての授業を英語で行っている。</p> <p><b>【経済学研究科】</b> 「Global Master Program (GMAP) コース」と「国際コース」を設置し、すべての講義を英語で行う授業を多数開講し、海外大学の教員による授業や指導を取り入れている。</p> <p><b>【医学研究科】</b> 英語による授業科目のみで学位取得が可能な「医学研究国際プログラム」を設置している。  <a href="https://www.kobe-u.ac.jp/documents/NEWS/info/student/gaibushiken_2021.pdf">https://www.kobe-u.ac.jp/documents/NEWS/info/student/gaibushiken_2021.pdf</a>  <a href="https://www.kobe-u.ac.jp/documents/info/project/evaluation/2019-achievements-report.pdf">https://www.kobe-u.ac.jp/documents/info/project/evaluation/2019-achievements-report.pdf</a>  <a href="https://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/education_info/international.html">https://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/education_info/international.html</a>  <a href="http://www.sci.kobe-u.ac.jp/introduction/message.htm">http://www.sci.kobe-u.ac.jp/introduction/message.htm</a>  <a href="http://www.ams.kobe-u.ac.jp/ICHS/">http://www.ams.kobe-u.ac.jp/ICHS/</a>  <a href="http://www.law.kobe-u.ac.jp/GMAP/">http://www.law.kobe-u.ac.jp/GMAP/</a>  <a href="http://www.econ.kobe-u.ac.jp/admissions/gmap.html">http://www.econ.kobe-u.ac.jp/admissions/gmap.html</a></p> <p><b>○留学生との交流</b></p> <p>本学学生を神戸大学で受け入れる留学生のチューターとして雇用し、大学生活を支援すると同時に学生相互の国際交流を図っている。また、海外の学生を短期で受け入れるサマースクールなどで本学学生と交流する機会を設けている。具体例として、以下のような取り組みを行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国際人間科学部では、チューターが学生交流スペースである「IC Café」で様々な交流企画を実施し、チューターだけでなく全学部生が参加できる国際交流活動を行っている。</li> <li>・工学部では、平成30年度からサマープログラムを開始し、平成31(令和元)年度にはフランス、ドイツ、韓国、中国、台湾など多くの国から学生を受け入れ、工学部の学生にも参加させることにより、学生同士の国際交流の場となった。</li> <li>・国際教育総合センター（現グローバル教育センター）では、平成31(令和元)年度に、ジョージア工科大学、南カリフォルニア大学から学生と教員を受け入れ、それぞれキャンパスツアーやパーティーで本学学生や教員と交流を図った。ジョージア工科大学のプログラムでは、ジョージア工科大学学生と本学学生が合同でジョージア工科大学の教員による英語のみで行われる授業を受講したり、フィールドワークを行ったり、国際交流のみならず、本学学生にとっても海外の授業に直接触れることができる有益なものとなった。  <a href="https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2019_08_22_01.html">https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2019_08_22_01.html</a></li> </ul>	

大学等名	神戸大学
④取組の実績 【4ページ以内】	
<p><b>○海外の大学と連携して学位取得を目指す交流プログラムの開発</b></p> <p>本学では、海外で学位取得を目指すダブル・ディグリー・プログラムについて、平成28年度から令和2年度に8大学11コース、令和3年度には3大学3コースのプログラムを新たに締結し、平成28年度18コース、平成29年度21コース、平成30年度21コース、平成31（令和元）年度22コース、令和2年度18コース、令和3年度14コースを実施した。</p> <p>中でも特色のあるプログラムとして、経済学部では、平成28年度から武漢大学・貿易大学（ベトナム）・ルーヴァンカトリック大学（平成29年度より）との間で、「第3年次編入学ダブルディグリー協定」を締結し、学部ダブルディグリー・プログラムを展開している。また、国際人間科学部、国際文化学部・研究科、法学部・研究科、経済学部・研究科の学生がEUに関して多面的かつ体系的に学ぶ学位プログラム「EUエキスパートプログラム（KUPES）」（平成26年度開始）は、学部2年生から博士前期課程までの一貫したカリキュラムを提供し、EU圏の大学への交換留学とダブルディグリーの取得によって、学際的視野を拡張することを目指している。国際協力研究科においては、大学の世界展開力強化事業の採択を受け、パイロットプログラムの実績を経て第2モードにおいて、派遣した学生14名、受入れた学生16名がダブルディグリーを取得し、着実に実績を伸ばしてきた。</p> <p><a href="https://www.kobe-u.ac.jp/documents/international/office-affiliated/affiliated/mou_list20201101.pdf">https://www.kobe-u.ac.jp/documents/international/office-affiliated/affiliated/mou_list20201101.pdf</a>  <a href="http://www.office.kobe-u.ac.jp/intl-prg/eup/about/overview.html">http://www.office.kobe-u.ac.jp/intl-prg/eup/about/overview.html</a>  <a href="http://kobeucpasia.wp.xdomain.jp/">http://kobeucpasia.wp.xdomain.jp/</a></p> <p><b>○外国人教員や国際的な教育研究の実績を有する日本人教員の採用や、FD等による国際化への対応のための教員の資質向上（国際公募、年俸制、テニュアトラック制等の実施・導入を含む。）</b></p> <p>本学では、国際公募等により外国人教員に加え、国外の大学での学位取得、通算1年以上教育研究に従事した日本人教員の採用を積極的に行っており、総教員数に対する外国人教員や国際的な教育研究の実績を有する日本人教員の割合は高くなっている。ほかにも、外国人研究者の採用を促進するために、特定部局に限定していた外国人研究員制度（学術研究の国際交流活性化等を目的に、外国人研究員の招聘に係る経費の一部を支援する制度）を、令和元年度から全学を対象とする制度に拡充したことにより、平成30年度12名から令和元年度40名へと大幅に受入れが増えた。さらに、受入環境の拡充（宿舎の新営等）に向けてWG等で検討を進めている。</p> <p>また、次世代を担う優れた若手研究者養成の一環として、平成21年度から実施してきた若手教員長期海外派遣制度を継続して実施し、平成28年度10名、平成29年度15名、平成30年度12名、令和元年度5名、令和2年度3名、令和3年度9名を新規に派遣し、グローバルな人材の育成を図っている。若手教員海外派遣で海外経験をした教員の中には、帰国後、文部科学大臣表彰若手研究者賞や日本学術振興会賞を受賞した教員やTop10%論文に名を連ねる教員がいる。さらには、帰国後、95%以上の教員が科研費に採択されており、基盤(A)に採択された者も出ている。</p> <p>FDについては、平成29年度から、「学生の授業外学修時間を増加させるための工夫」や「英語による授業の質を高めるための工夫」などの内容のFDを重点的に実施し、令和2年度においては、COVID-19の影響もあるが、様々な場所から授業を受講できるよう「遠隔授業実施のためのスキルを身につける」ためのFDを充実させたことから、FD活動への本学教員の年間延べ参加者数は、令和元年度までは4,000名以上の参加者であったが、令和2年度は5,000名以上に上り、学部生の授業外学修時間の増加、外国語による授業科目の割合の増加、国際通用力を強化したプログラムの充実などにつながった。</p> <p>年俸制については、教員の流動性を高めるため、新たな年俸制適用教員制度を導入し、新規採用教員への原則適用を開始した。在職教員への募集を行うとともに、役職者や60歳以上のシニア教員へ切替えの協力を依頼するなど注力した結果、旧年俸制適用教員数と併せて延べ390名となった。</p> <p>テニュアトラック制度については、平成27年度に本学独自の「神戸大学テニュアトラックプログラム」として制度を開始しており、平成28年度8名、平成29年度7名、平成30年度3名、令和元年度6名、令和2年度2名、令和3年度7名の若手教員を採用した。テニュアトラック教員については、メンター教員、URA等による支援のもと、外部資金の獲得についても順調に進めており、平成27年度採用者7名のうち4名、平成28年度採用者8名のうち2名、平成29年度採用者のうち1名が、科研費の応募資格を得て以降、初めて科研費の採択を受けている。また、平成28年度に採用されたテニュアトラック教員のうち1名は、平成31（令和元）年度に本学の「優秀若手研究者賞」を受賞している。このほか、テニュアトラック期間中に研究実績を積み、他大学のテニュアポストを得て転出する者もあり、着実に優秀な若手研究者の育成を進めている。令和3年度からは、新たなテニュアトラック制度の全学方針を策定し、各学域にて規程等整備し各々に制度運用を開始している。</p>	

大学等名	神戸大学
<b>④取組の実績</b> 【4ページ以内】	
<p><b>○英語のできる国際担当職員の配置、語学等に関する職員の研修プログラム等、事務体制の国際化</b></p> <p>国際関係対応能力を強化するため、平成17年度から事務職員対象の国際業務研修を実施している。研修内容の見直しは随時行い、事務職員の国際化に資する内容になるよう改善を行っており、本学国際業務研修受講者の中から優秀な者を選抜し海外研修を行う等、事務体制の国際化整備を行っている。なお、新型コロナウイルス感染拡大の状況により、令和2年度は研修の実施を見送り、令和3年度は、オンラインで国際業務研修を行った。また、文部科学省国際業務研修・国際教育交流担当職員長期研修プログラム（LEAP）や日本学術振興会国際学術交流研修に本学職員を派遣し、国際交流に関する幅広い見識を有する国際人材の育成に努めている。</p>	
<p><b>○厳格な成績管理</b></p> <p>大学教育推進機構において、「神戸大学における成績評価方針」を策定し、平成28年度前期から各学部の成績分布による成績評価（秀の割合）の点検を実施した。「秀」の割合が比較的多い学部については、原因を調査の上、今後の成績評価方法の改善に向け取り組むよう指示した結果、平成30年度には全ての開講部局の成績分布において「秀」の割合が10%程度にまで改善された。引き続き、各部局において秀の比率の多い科目などの点検・改善を進めるよう指示するとともに、平成30年度に成績評価方針の一部を見直し、各部局における「秀」と「優」の合計比率を履修者の概ね40%程度を上限とすることを目安として定め、部局全体の秀と優の合計比率について各部局で確認することとし、学生に対して明示した。</p>	
<p><b>○学生が履修可能な上限単位数の設定</b></p> <p>単位の実質化、質を保証するため、履修科目の登録上限を設定すること（キャップ制）を規則で定め、履修登録上限単位数をそれぞれの学部の特性に応じて、適切に設定している。</p>	
<p><b>○明確なシラバスの活用等による学修課程と出口管理の厳格化等、単位の实質化</b></p> <p>本学では、「学位授与に関する方針」に掲げる国際的に卓越した教育を保証し、「単位の实質化」を進めるため、平成24年度入学生から「GPA（Grade Point Average）」を通知している。平成30年度には新たに「教育の内部質保証に関する自己点検の実施に関する内規」を策定し、平成31（令和元）年度に、「内部質保証の体制と手順に関する点検リスト」に基づき自己点検を全教育課程単位で実施し、全学的に点検項目を概ね満たしていることが確認できた。なお、自己点検を行う過程において、シラバスの一部において記載が十分でない項目があったことから、令和2年度のシラバス作成に向けて全学教務委員会で「シラバスの入力項目及び記載例（日本語版・英語版）」を作成し、改善を進めた。</p> <p>また、各学部及び研究科における教育課程の系統性、順次性及び科目の水準を明らかにし、学生の履修計画、学修活動の手助けとなるように、平成28年度の入学者対象のカリキュラムから、科目ナンバリングを導入し、シラバスにも記載している。</p> <p>学修課程の管理においては、教務情報システムに加えて、①学修支援システム「BEEF」、②「神戸スタンダード」の達成度を自己点検するためのチェックリスト、③「ポートフォリオフォルダ」によって構成する学修ポートフォリオを構築し、学びのアウトプットの蓄積を推進することで、学生の学修支援に活用している。学修支援システム「BEEF」（平成27年度導入）について、平成28年度にBEEFと教務情報システムを自動で連携する機能を追加し、学生がBEEF活用により授業開始前から主体的に事前学習ができるよう改善するとともに、学生の学修成果を測るために全学部生の学修時間等を調査する機能を教務情報システムに導入し「学修の記録」を開始した。平成29年度には前年度の「学修の記録」の集計結果をもとに、学生の能動的・自主的かつ質を伴った学修を増やすために、各学部への指導や全学FDなどを通じて、各学部において、BEEFを利用した科目数を増加させ、BEEFの利用を促進した。BEEFを利用した授業の科目数は、平成29年度には1,342科目（対前年度比139.6%）と大幅に増加し、学部生の授業外学修時間についても7.6時間/週と前年度より4.1%増加（平成28年度7.3時間/週）となった。平成30年度～平成31（令和元）年度にかけては、授業の双方向性を高め、学生の能動的かつ質を伴った学修を引き出すための「BEEF活用セミナー」を教員に向けて実施するなど、引き続き学部生の授業外学修時間増加に向けて取り組んだ結果、平成30年度は9.5時間/週、令和元年度は9.7時間/週と順調に増加しており、令和2年度は、COVID-19の影響により、ほとんどの授業がオンラインに切り替わったこともありBEEFの活用が促進されたため、学生の授業外学修時間も13.0時間/週と大幅な増加につながった。</p>	

大学等名	神戸大学
⑤事業の評価【1事業ごとに1ページ以内】	
大学の世界展開力強化事業（平成28年度採択）事後評価結果	
大学名	神戸大学
整理番号	A①-5
事業名	東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム
◇大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価	
総括評価	事業計画どおりの成果をあげており、事業目的は実現された。
A	
コメント	<p>本事業は、高麗大学校及び復旦大学と協力して、東アジアの言語及び社会に対する理解や社会科学諸分野における学術的専門性を高め、リスク・マネジメントという観点から問題を分析し政策策定を主導するスキルを身に付けた、国際機関や NGO で活躍できるようなグローバル人材の育成を目指している。</p> <p>事業展開では、ダブルディグリー・プログラムが順調に発展し、短期プログラムや交換留学といった周辺の交流プログラムも充実している。コンソーシアム運営委員会において、カリキュラム、単位認定、成績基準等を協議して決定することが図られ、教員連絡会議においては共同研究指導のための意見交換の機会が設けられており、質保証の仕組みが確立している。「キャンパスアジア室」が機能しており、外国人学生に対するサポート体制が整備されているとともに、産業界と連携し、インターンシップや就職支援を行っている点も評価できる。</p> <p>また、国際合同シンポジウムの開催により多様性のある学生が集うことができるような工夫がなされており、大学の国際化に貢献しているといえる。SNS 等による国内外への情報提供も積極的に実施されている。</p> <p>全体的な目標の達成状況としては、日本人学生数が計画を大幅に上回っている点は評価できるが、一方でコロナ禍において、外国人学生数の受入数が達成目標を下回っている側面も見受けられた。コロナ禍での経験が今後のリスク・マネジメントに反映されることを期待したい。また、今後の展開として、3大学が進めてきたプログラムを東南アジア諸国も含めて拡張していくとしているが、成功しているインターンシップの組み入れや修了生との連携等、プログラムの更なる魅力向上を視野に入れ、東南アジア諸国への展開が具体化されることを期待したい。</p> <p>最後に、大学の世界展開力強化事業による補助期間は終了したが、引き続き質保証を伴う発展的な事業展開の実施によって、我が国の大学教育を牽引し、更なるグローバル展開力の強化に寄与されることに期待する。</p>

大学等名	神戸大学
⑤事業の評価【1事業ごとに1ページ以内】	
<p>成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成(enPiT)《中核拠点》 事後評価結果</p>	
代表校名	大阪大学
取組名称	ビックデータ・AI・クラウド技術を用いた課題解決人材育成
<p>成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成(enPiT)事業委員会による評価</p>	
<p>[総括評価]</p> <p>A：当初の事業目的を達成することができ、当初目標の効果、成果が十分に得られたと判断される。</p>	
<p>[コメント]</p> <p>修了者数等が当初の目標値を上回り、基礎知識学習、PBL 基礎、発展学習と3段階に分けた学修内容の設定や、参加各校の実情に合わせたカリキュラム、土日や夏季休業期間における実施等、様々な工夫により効果的な実践教育が提供されたことは評価できる。</p> <p>また、連携大学も含め、IT 関連企業のみでなくユーザー企業も含んだ多岐にわたる企業に参画してもらい、幅広い視野の中で実践教育を実施していることや、大学のみでなく、高等専門学校の学生に対しても実践的な教育を提供していることは評価できる。</p> <p>この取組を補助期間終了後も継続的に実施していくにあたり、連携大学も含め、これまでのプログラムの成果を速やかに学部教育のカリキュラムに反映することが期待される。</p> <p>また、外部評価委員会をより活用し、PDCA サイクルを機能させながら取組が発展することが期待される。</p> <p>さらに、AI・ビッグデータ等における個々の技術とともに、これらの技術を活用した顧客価値の創出が益々重要となることから、当事業の知見をより発展的な教育に活かすことが望まれる。</p> <p>今後は、運営拠点とも連携し、当事業のPDCA サイクルにおいて培った知見や手法を整理し、そのノウハウを普及・展開することで他大学の取組に資するとともに、引き続き優れた情報技術人材を育成いただきたい。</p>	

大学等名	神戸大学
⑤事業の評価【1事業ごとに1ページ以内】	
「医療データ人材育成拠点形成事業」取組概要及び中間評価結果	
整理番号	2
申請担当大学名 (連携大学名)	京都大学 大阪大学、京都大学、京都府立医科大学、神戸大学、滋賀大学、 滋賀医科大学、鳥取大学、奈良県立医科大学、兵庫県立大学、 和歌山県立医科大学
事業名	関西広域 医療データ人材教育拠点形成事業
事業推進責任者	京都大学大学院医学研究科長 岩井 一宏
取組概要	
<p>本拠点形成事業では、次世代医療基盤や保健医療データプラットフォームに蓄積されるデータを活用し、医療データサイエンスの国際的牽引役を担えるよう本邦の医療データサイエンスを発展させるために、医療データが生まれてから活用されるまでの情報流の始点から終点までを確実に支え、正しく統制できる人材の育成を行う。具体的には、関西健康・医療創生会議の元に集う関西の大学各々の強みを活かし、代表機関である京都大学が取り纏める修士レベルの基本プログラムと、創生会議が関西広域連合(官)と関西経済連合会(産)のニーズに応じて参加各大学(学)に開発させて提供するインテンシブプログラムを通じて、医療データ利活用基盤を構築・運営できる「基盤人材」、データを適切に利活用できる「活用人材」、及び、医療データ活用の全体を律し、社会的コンセンサスを醸成する「統制人材」を育成し、本邦医療データサイエンスの発展を支えることを目指す。</p>	
中間評価結果	
<p>(総合評価) B おおむね順調に進捗している。 一部内容を改善し事業を継続すべきである。</p>	
<p>(コメント) ○優れた点、◆改善を要する点</p> <p>【優れた点等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 産官学の連携の場となる関西健康・医療創生会議の基盤を生かした取組は概ね良好に進捗している。</li> <li>○ 産官のニーズを反映した目的別コースの設定により、即戦力としての医療データ人材育成を実施している。</li> <li>○ 幅広い外部評価者の参画による評価体制が構築されている。</li> </ul> <p>【改善を要する点等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 産官学連携の基盤がある利を生かし、カリキュラムは逐次、意見を反映した改変を行うとともに、連携大学との連携内容を明示し、強みや魅力を生かした教育プログラムとなるよう検討すること。</li> <li>◆ 社会変革型医療データサイエンティスト育成プログラム(インテンシブコース)において、受入目標人数を達していないので、例えば SNS や web サイトの充実等の更なる広報の拡大と、受講しやすい環境を検討すること。</li> <li>◆ 自立的な事業継続のため、引き続き概算要求以外の具体的な財源確保策を検討すること。</li> </ul>	

大学等名	神戸大学
⑥他の公的資金との重複状況 【2ページ以内】	
<p><b>【大学改革推進等補助金】</b></p> <p>●ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材育成事業 新型コロナウイルス感染症のまん延により、zoom等を活用した遠隔授業は急速に広まったが、単に授業をインターネットで配信するだけでは双方向の議論や実習実施が困難となり教育の質の低下が危惧される。そこで本取組みでは、医師・看護師養成にあたっての教育効果の向上に資するものとして、シミュレーション教育の適用拡大、およびDX化による臨床実習の高度化を図ることとしている。</p> <p>●デジタルと専門分野の掛け合わせによる産業DXをけん引する高度専門人材育成事業 農業分野におけるDXの推進を目的として、本事業はローカル5Gを基盤設備として種々のデジタルスマート農機の導入を図り、省力化や高精度化の理解に加え機器の原理や特性に言及した教育プログラムを提供することで、機器が活用できるだけでなく、活用する経営体を支援し、また機器を開発できる人材の育成を目指すものである。</p> <p><b>【国際化拠点整備事業費補助金】</b></p> <p>●大学の世界展開力強化事業（アジア高等教育共同体形成促進） 令和3年度に選定された「異分野共創によるリスク・マネジメント専門家養成共同教育プログラム」は、神戸大学・復旦大学・高麗大学校で構築した共同教育プログラムをチュラロンコン大学、ラオス国立大学に発展させ、単位の相互認定等の質の保証を伴ったプログラムを構築している。また、国際機関等でのインターンシップを充実させ、専門的知識に基づいた実践的スキルが修得できる共同教育を提供している。</p> <p><b>【日本学術振興会国際交流事業】</b></p> <p>●日本学術振興会 二国間交流事業…個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チーム等の持続的ネットワーク形成を目指し、相手国の研究者と協力して共同研究・セミナーを実施しており、令和4年度はフランス、ドイツ、ハンガリー、フィリピン、ニュージーランド、クロアチア、韓国、インド、英国、ポーランド、台湾、ヨルダン、スペイン、中国の15カ国と計19件の事業に取り組んでいる。</p> <p>●日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）…日本と交流相手国の拠点機関同士の協力関係に基づく双方向交流として、「共同研究」、「セミナー」、「研究者交流」を効果的に組み合わせて実施し、令和4年度は英国、ドイツ、デンマーク、米国、カナダの5カ国との共同事業1件に取り組んでいる。</p> <p>●日本学術振興会 国際共同研究事業 英国との国際共同研究プログラム…英国研究・イノベーション機構（UK Research and Innovation, UKRI）との合意により国際共同研究を実施し、令和4年度は2件の事業に取り組んでいる。</p>	

大学等名	神戸大学
⑥他の公的資金との重複状況 【2ページ以内】	
【日本学生支援機構令和4年度海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）】	
令和4年度は以下のプログラムが採択されている。	
<p>●双方向協定型14件</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SDGsに取り組むネットワーク形成に寄与する双方向型留学プログラム</li> <li>・グローバル・ビジネスリーダー養成のための学習集中型交換留学プログラム</li> <li>・地球的諸課題の解決を目指す先導的高度人材育成のための神戸大学全学交換留学プログラム</li> <li>・法学政治学系グローバルエリート養成プログラム（「神戸GEEPLS」）</li> <li>・経済学の専門性を活かす高度グローバル人材育成のための世界トップレベル大学との国際協働交換留学プログラム</li> <li>・先端技術と国際性で新たな社会を牽引するエンジニア育成プログラム※1</li> <li>・東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム</li> </ul>	
短期研修・研究型（協定派遣）7件	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・神戸グローバルチャレンジプログラム</li> <li>・DX時代に対応した創造的多文化協働社会の形成を促進する専門的人材養成プログラム</li> <li>・多様な高度グローバル人材育成のためのブースター型派遣プログラム</li> <li>・「協働型グローバル人材」を養成する短期海外フィールド学修プログラム</li> <li>・神戸大学グローバル医療人材育成プログラム（短期派遣）</li> <li>・国際協力人材育成プログラム：「国際協力の最前線」で学ぶ</li> <li>・ユネスコチェア事業によるジェンダーに配慮したグローバル減災教育プログラム</li> </ul>	
短期研修・研究型（協定受入）3件	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・神戸オックスフォード日本学プログラム（KOJSP）</li> <li>・神戸大学ポストコロナ時代のグローバル医療人材育成プログラム</li> <li>・東アジアを中心とした海事系大学交換留学生のための多才な海洋人材育成プログラム</li> </ul>	
※1 今回の申請の主担当研究科のプログラムであるが、本申請との直接的な関連はない。	